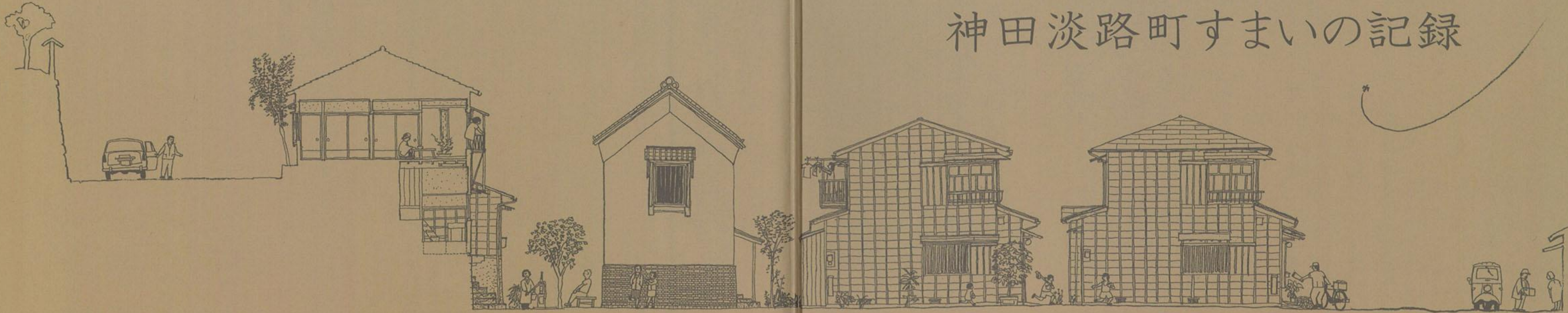



# 神田淡路町すまいの記録



日本建築家協会関東甲信越支部 千代田地域会





千代田区神田淡路町二丁目

千代田区に残っていた  
大正・昭和の記憶がまた一つ  
無くなりました

記憶を記録として伝えるために  
神田淡路町長屋調査を行いました



# 目次

- 1 千代田区に残っていた大正・昭和の記憶がまた一つなくなりました
- 2 目次／孫に読んであげられるような報告書を目指して
- 4 ことのはじまり
- 6 江戸時代そこは福山藩の屋敷でした
- 8 震災の復興とともに
- 10 長屋の今と昔
- 14 路地の空間
- 16 小松さんのすまい
- 20 吉田さんのすまい
- 22 西村さんと池田さんのすまい
- 24 山崎さんと内田さんのすまい
- 26 中島さんのすまいと店
- 28 角倉さん(脇田さん)と岩堀さんのすまい
- 30 小松さんと安部さんのすまい
- 32 排水利用の水洗便所がありました
- 34 小松さんの家の建具
- 36 土蔵のある長屋
- 38 淡路町長屋周辺のあれこれ
- 40 おわりに
- 41 調査・記録作成スタッフ
- 42 30数枚の野帳より

孫に読んであげられるような報告書を目指して

建物解体に伴う調査・報告書は資料としては重要ですが、一般の方には敷居が高く、まり読む気がしません。私たちは、そこに住まわれていた方が“おばあちゃんが住んでいたのはこんなところだったのよ”と孫に読んであげられるような報告書が出来ないかと考え作成したのがこの記録です。

そのような気持ちで読んでいただければ幸いです。

[編集担当:桐原武志]

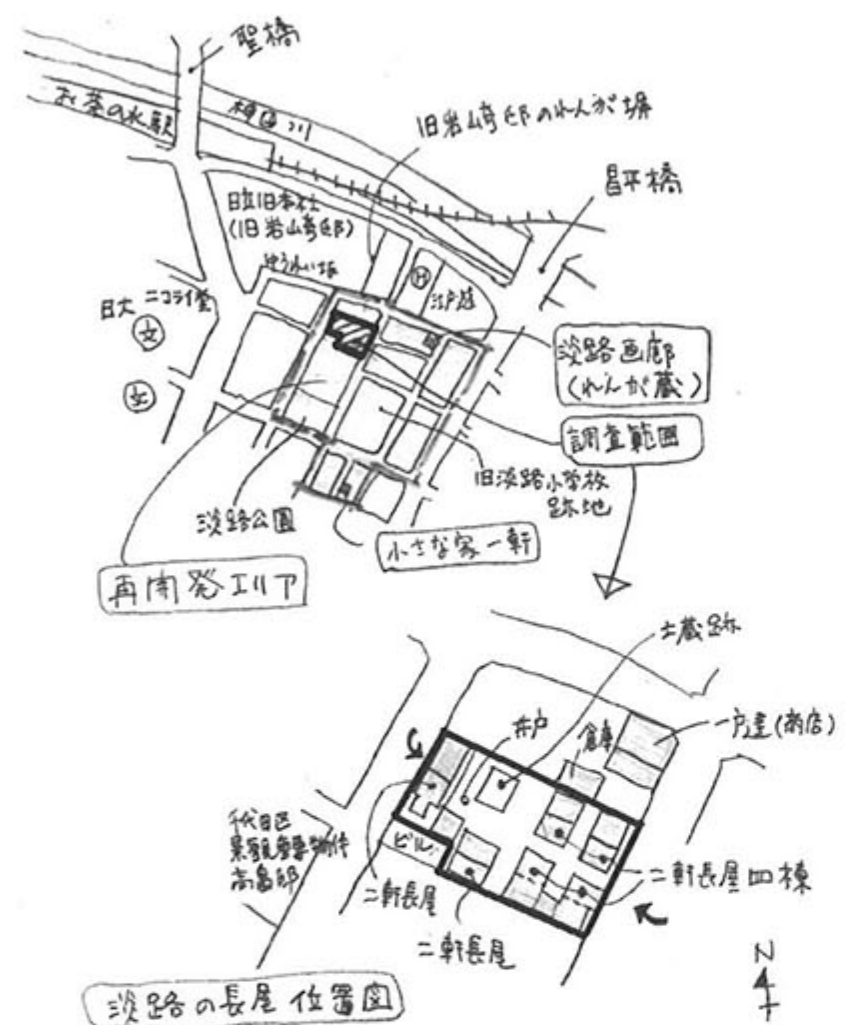


# ことのはじまり

お茶の水の駅から淡路坂を下った神田淡路町二丁目に2009年秋まで、80年前に建てられた長屋がありました。今、この一体は大規模な再開発の工事が始まっていて、そのあとかたも残っていません。ここに住んでいた人々が、日々暮らしていた家や路地や井戸も、新しいたてものを作るために取り壊されることになり、立ち退きが始まりました。最後の荷物を片づけ終わった老夫婦が、粗大ゴミになった箆笥や衣装入れの茶箱やらを眺めながら、この町の最後を惜しんでいました。新しくなる町は、災害に強く、安全になりますが、長屋からは火事を出したことがなかったと言います。火元の確認が一番大事なことからです。一軒から火事を出したら近所に迷惑をかけるということをおじいさんやおばあさんから代々言い聞かされていました。

1923年(大正12年)9月1日の関東大震災で、廃墟と化した土地から人々は立ち上がり、暮らしを取り戻しました。その姿を写真で見ても想像することは難しく、生き証人も数少なくなってきた今、ここに建っていたすまいは、民間の震災復興を語る証です。人々の記憶だけに残ることになった町を記録するため、解体前の数日間、JIA千代田地域会のメンバーが中心となって、関心を寄せてくれた協力者と共にたてもの実測と聞き取り、写真撮影を行いました。これはそのささやかな「すまいの記録」です。[大橋智子]

このすまいの記録は確かにここに人々が住んでいたことを書き残すため、あえてお名前と呼ばせて頂きました。お名前の使用にあたり、ご本人に了解を得るように努めました。残念ながら一部の方とは連絡が取れませんでした。また、お名前は最後の住人の方を使用しました。





# 江戸時代、そこは福山藩の屋敷でした

江戸時代末期、そこは備後(今の広島県)福山藩11万石、阿部家の屋敷でした。その敷地面積は約2万6千㎡、今の淡路町二丁目の大半を占める広大な屋敷でした。阿部の殿様で有名なのは、日米和親条約を締結して日本を開国した老中・阿部正弘。大名当主以下、家来の侍たちがここに住み、江戸城に通っていたのです。

長屋の位置は、その屋敷の北西隅にあたります。道を挟んで西側は、定火消(じょうびけし)と呼ばれる消防をつとめる旗本の屋敷で、今、ニコライ堂のある高台には、火の見櫓がそびえていました。

明治になって、大名も武士という身分もなくなると、屋敷跡には道路が通され、数ブロックに分けられて、大通りに面するところは商店、奥まったところは邸宅あるいは学校や病院の敷地になります。

建設中のニコライ堂の足場から撮った写真があります。のちに淡路小学校となった場所には、その前身の小川女子尋常小学校があります。長屋の場所にも邸宅が建っています。[市川達夫]



(左) 文久3年(1863)の淡路町  
——尾張屋版切絵図より  
(右) 明治16年(1883)の淡路町——  
陸軍参謀本部編五千分之一図より

のちに「長屋」が建つ位置。  
邸宅地に変わっています。

小川女子尋常小学校

定火消の屋敷。高台で  
火の見櫓がありました。

のちに「長屋」が建つ位置。  
福山藩阿部侯の屋敷の一角で  
した。(伊予守は官名で、領  
地と関係なく授けられました)

定火消屋敷跡はロシ  
ア公使館の土地にな  
っています

このあたりが  
「長屋」の位置

小川女子尋常小学校

明治22年(1889)頃、建設中のニコラ  
イ堂から撮ったパノラマ写真



# 震災の復興とともに

長屋の歴史はじまる

明治の終わりごろ、安田財閥の所有だったこの邸地に、三越百貨店の役員だった山岡さんが移ってきます。

大正12年(1923)、関東大震災が起こった時、山岡さんの邸宅は改築中でした。のちの長屋の住人のひとり、山崎さんのおじいさんは、その当時、山岡家の出入りの大工でその仕事に携わっていたそうです。その家の庭園を背後に「山岡」という印のはいった半纏姿の山崎棟梁の写真があります。

改築中の家が震災によって灰燼に帰したため、山岡さんはこの場所に住むのをあきらめ、そのあとに、この長屋が建てられました。震災復興、昭和の始まりとともに、この長屋の80年の歴史も始まったのでした。

長屋の建てられて間もない時期の、この長屋とあたりの街の様子が、航空写真で残っています。長屋のすぐ南側は阿久津病院です。震災で痛んだニコライ堂が修復されています。震災復興計画で新しくできた広い本郷通りと聖橋が見えます。淡路小学校・淡路公園も、できたばかりの姿を見せています。[市川達夫]



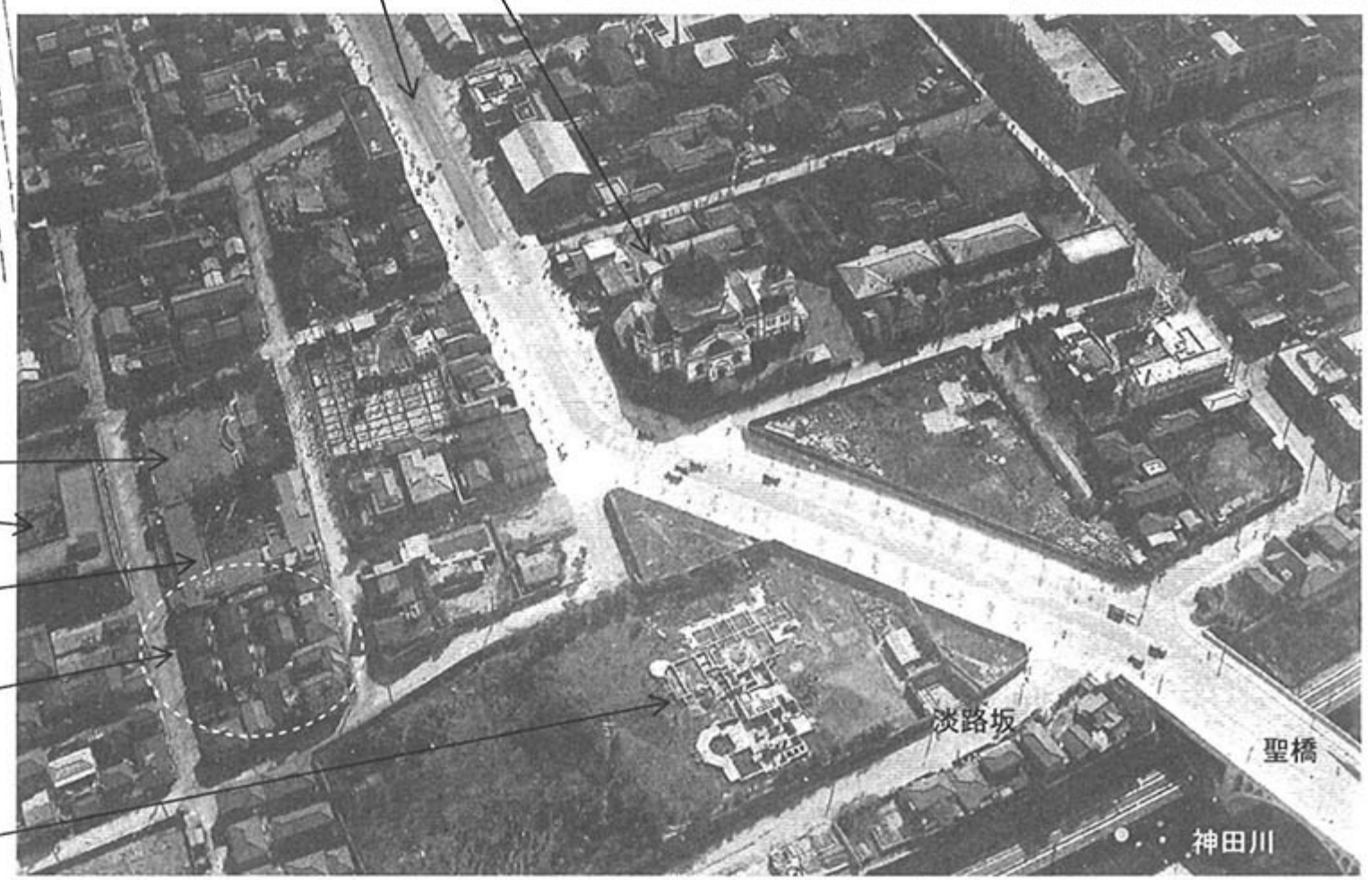
のちに長屋が建つ場所  
「山岡才次郎」とあり、山岡さんが  
地上権を得ていることがわかります。  
山岡才次郎さんは、三越の取締役で、  
常務・監査役を歴任しました。



「山岡」の文字が入った半纏を着る  
山崎棟梁 (山岡邸の庭にて)  
——大正12年(1923)頃

昭和8年(1933)頃の  
淡路町と本郷通り  
——博文館編『大東京写真案内』

大正元年(1912)『東京市及接続部  
地籍地図』より(関東大震災前)



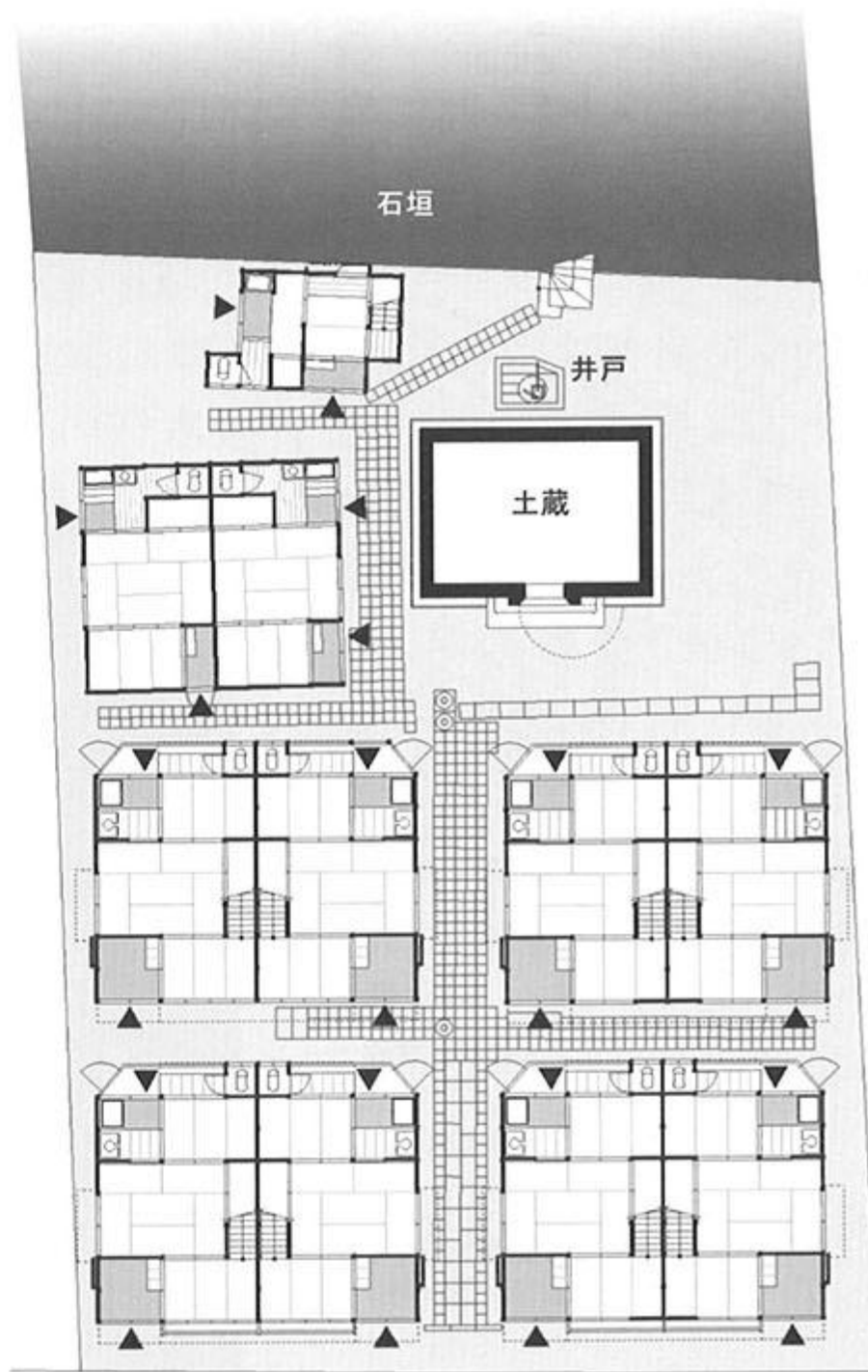


# 長屋の今と昔 1925年頃

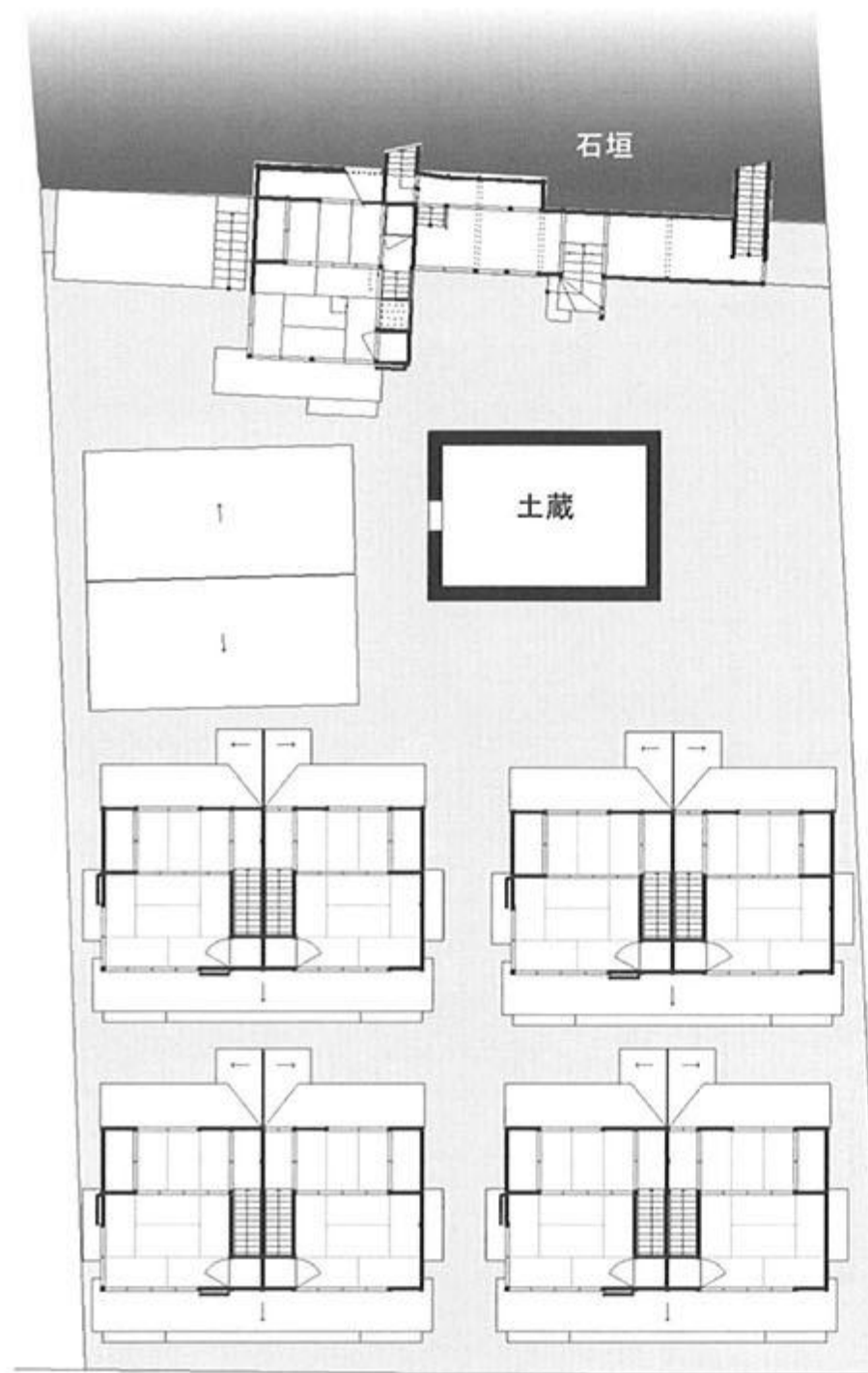
関東大震災であたり一面焼け野原になり、屋敷跡に残っているのは大谷石の石垣と土蔵だけでした。焼け跡には、これから始まる普請の段取りを思いめぐらしている山崎棟梁の姿がありました。まずは土蔵に住みながら、石垣を拠り所に一軒目の普請に取りかかりました。その後二軒長屋を順次建ててゆきますが、おそらくここでの最後の仕事となったのが、同じ平面の二軒長屋、4棟でした。敷地の南道路に面した2棟だけ寄せ棟屋根になっていて、窓には千本格子がついています。別荘やお屋敷を手掛けてきた棟梁の遊び心だったのでしょうか。[大橋智子]



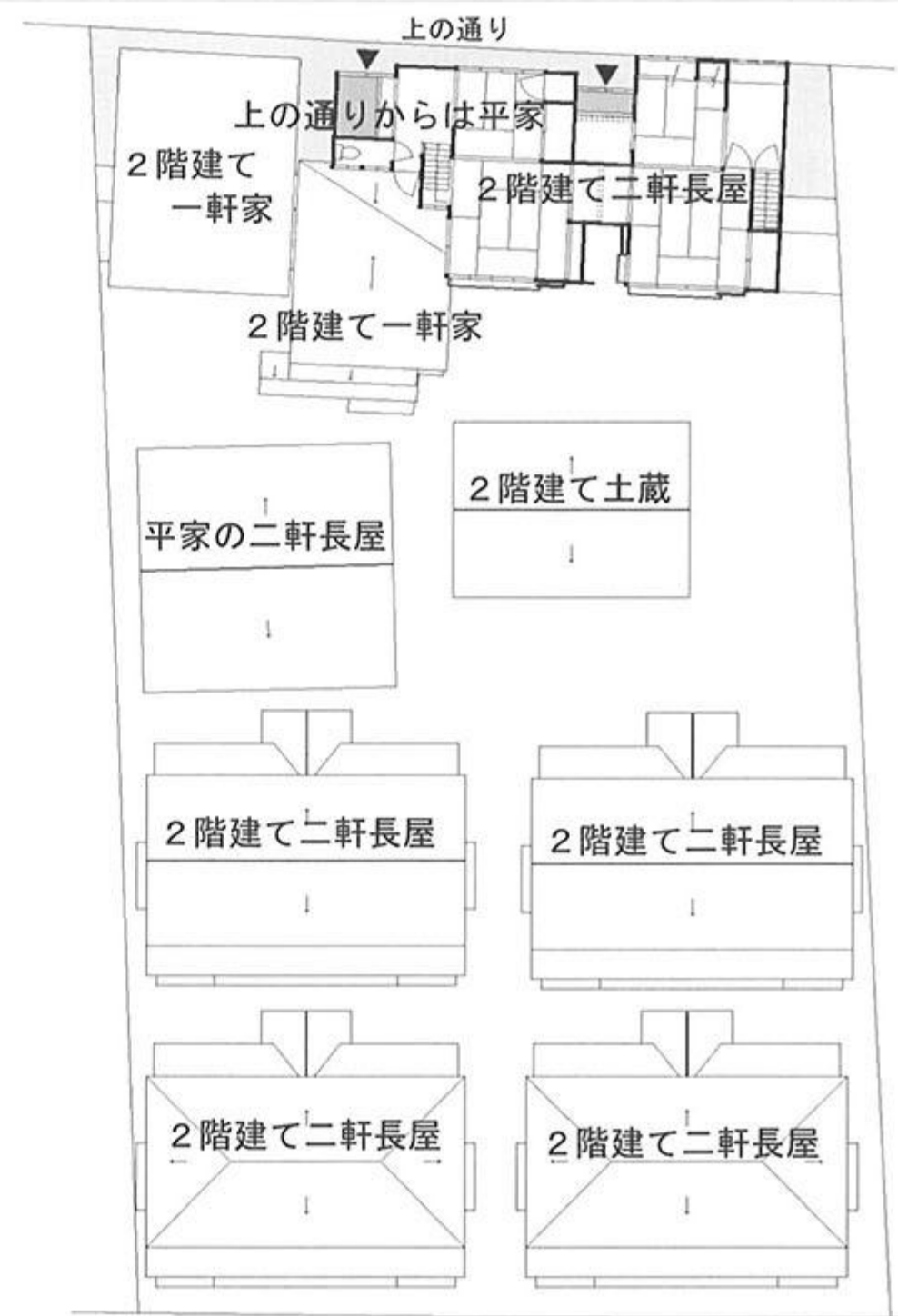
関東大震災直後、淡路町から見たニコライ堂  
(東京都慰霊堂 所蔵)



前の通り  
建築当時の1階平面図(推定)



建築当時の2階(上の家の地階)平面図



建築当時の屋根伏図(上の家の1階平面図)

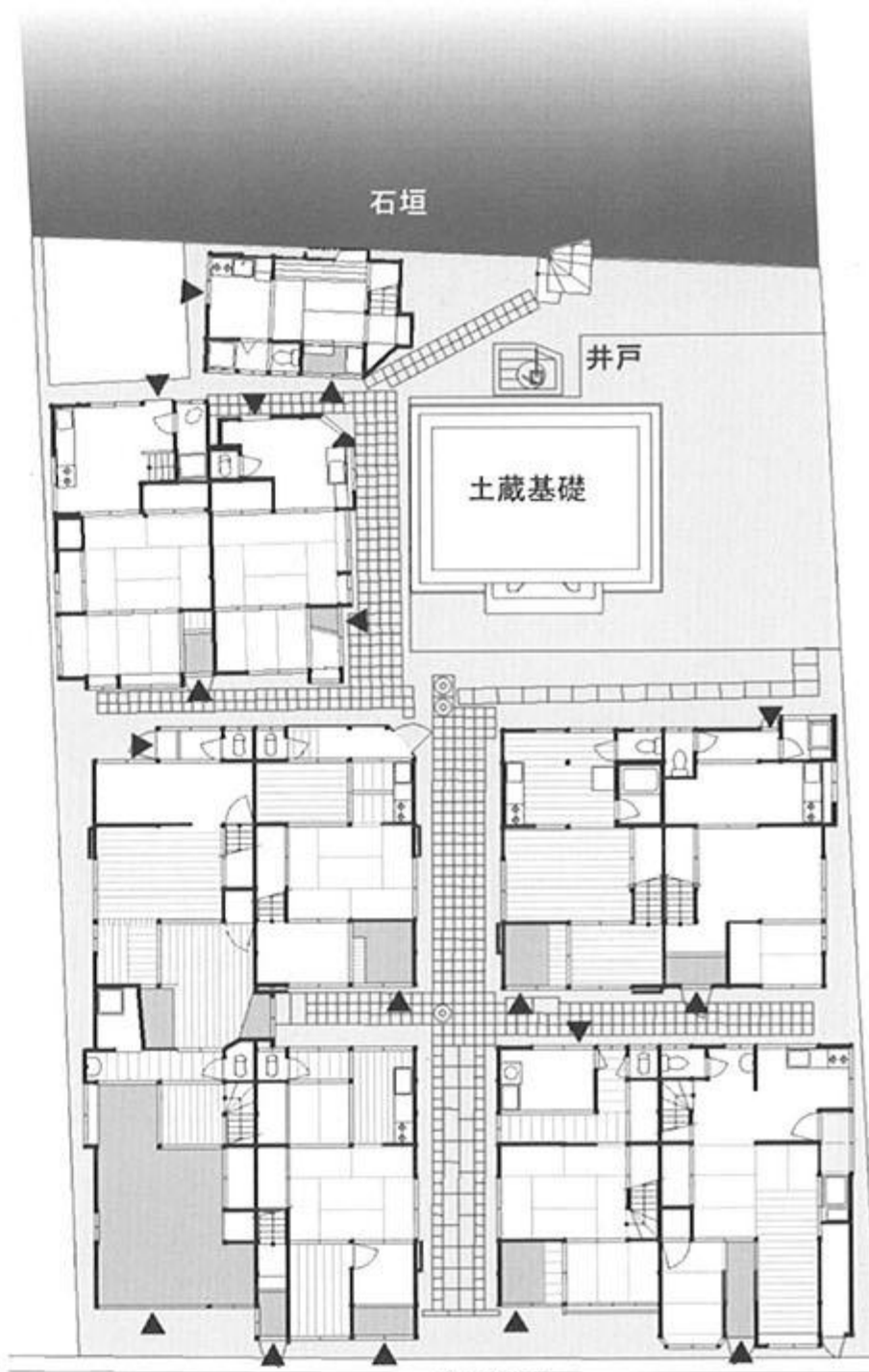


# 長屋の今と昔 戦後～2009年

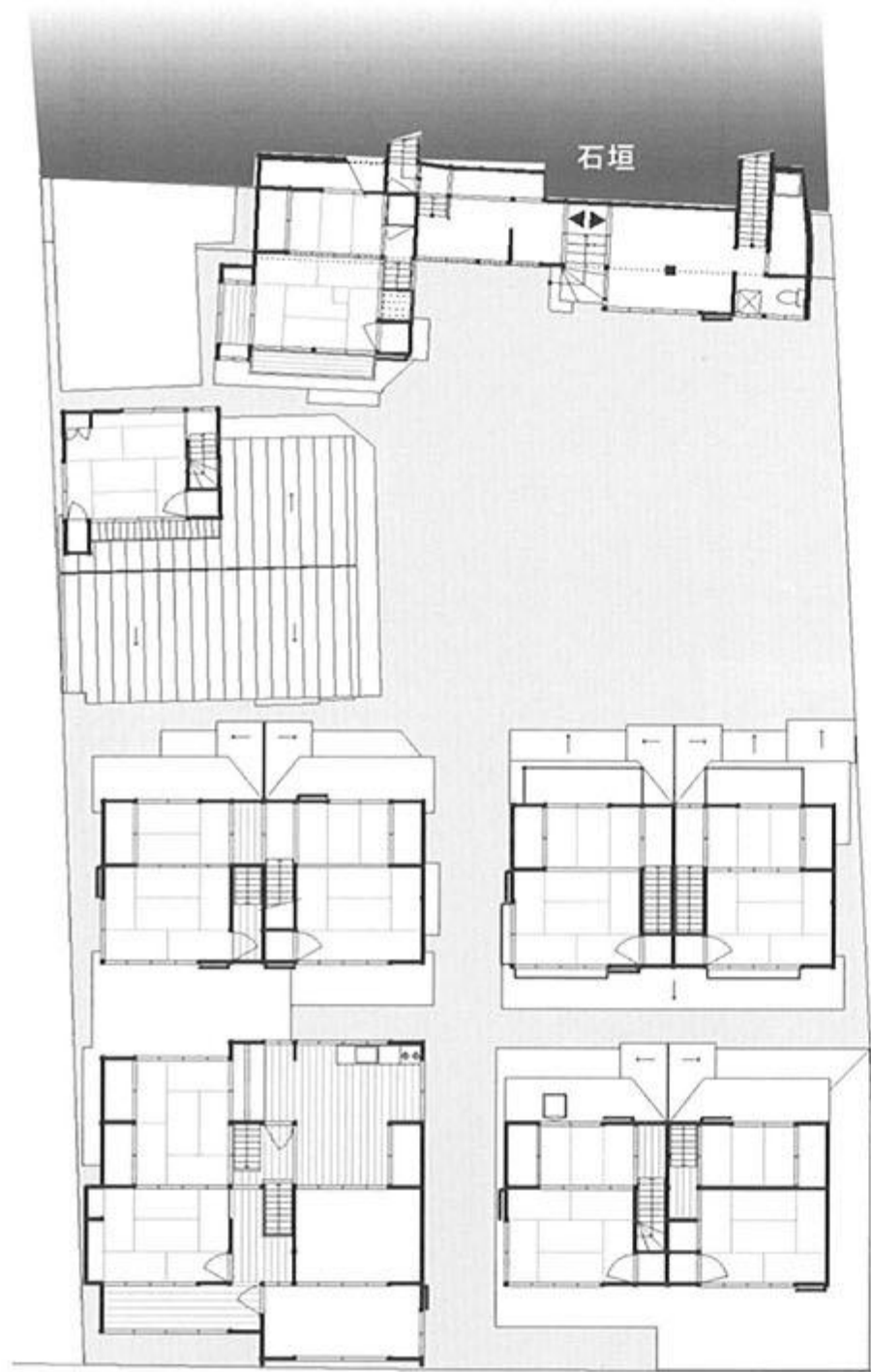
戦争も終わり、日本経済の復興と共に人々の生活に少しずつ余裕が出てきました。それに伴い、建物の所有形態も借家から持ち家になると、家族構成に合わせて、各家建物の増築に取りかかりました。北側の濡れ縁をつぶして台所を半間延ばしたり、敷地境界側に物入れを作ったり、工夫して浴室も増築しています。家業の店や作業場を設けたり、借家にするために玄関や階段の向きを変えたり、自家用車を持つようになり、車庫を作った家もありました。それでも、いつも変わらないのは家と家をつなぐ路地でした。 [大橋智子]



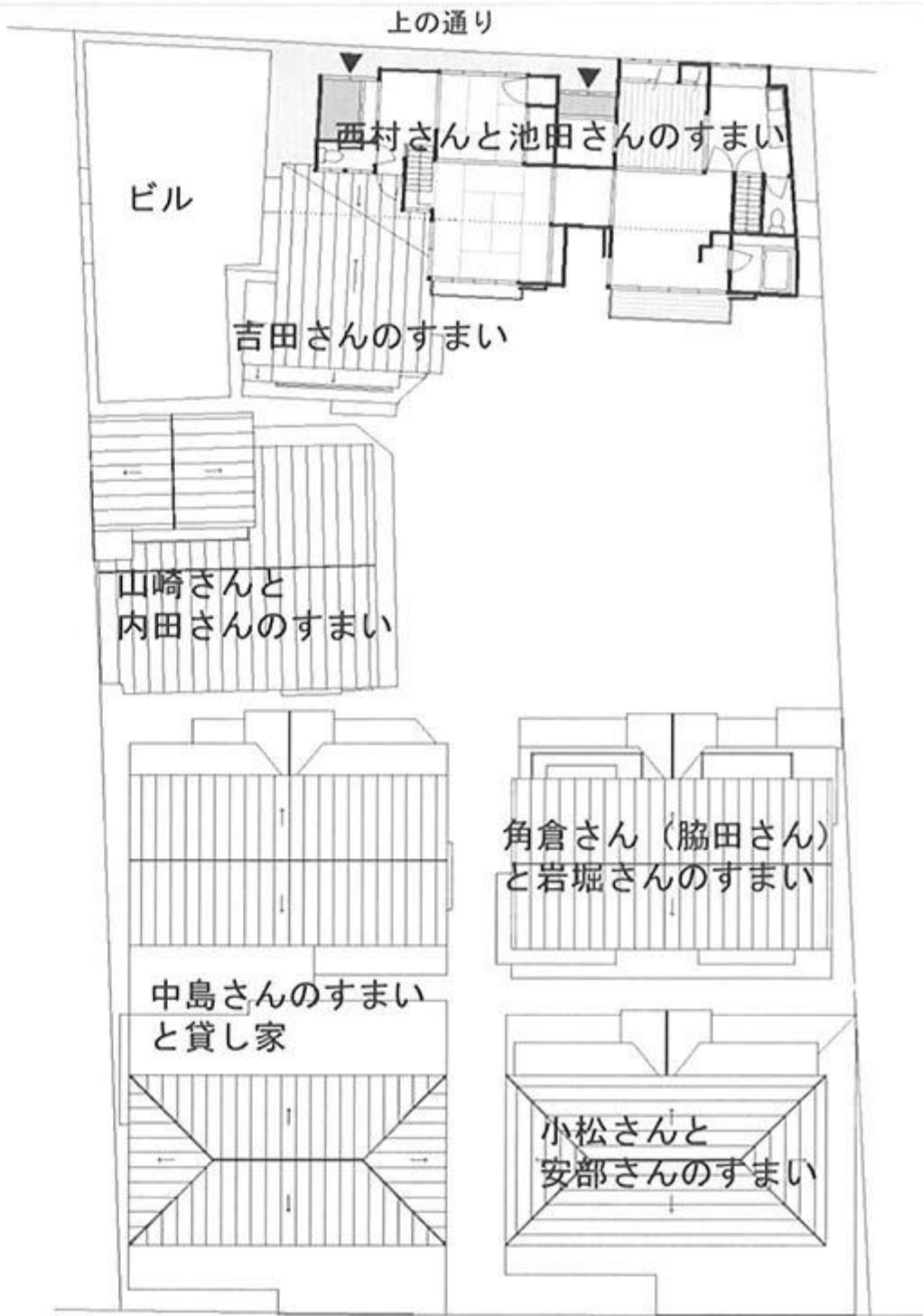
西村さんのすまいから見た長屋の様子



調査時の1階平面図  
前の通り



調査時の2階（西村さん、池田さんのすまいは地階）平面図



調査時の屋根伏図（西村さんと小池さんのすまいは1階）



## 路地の空間

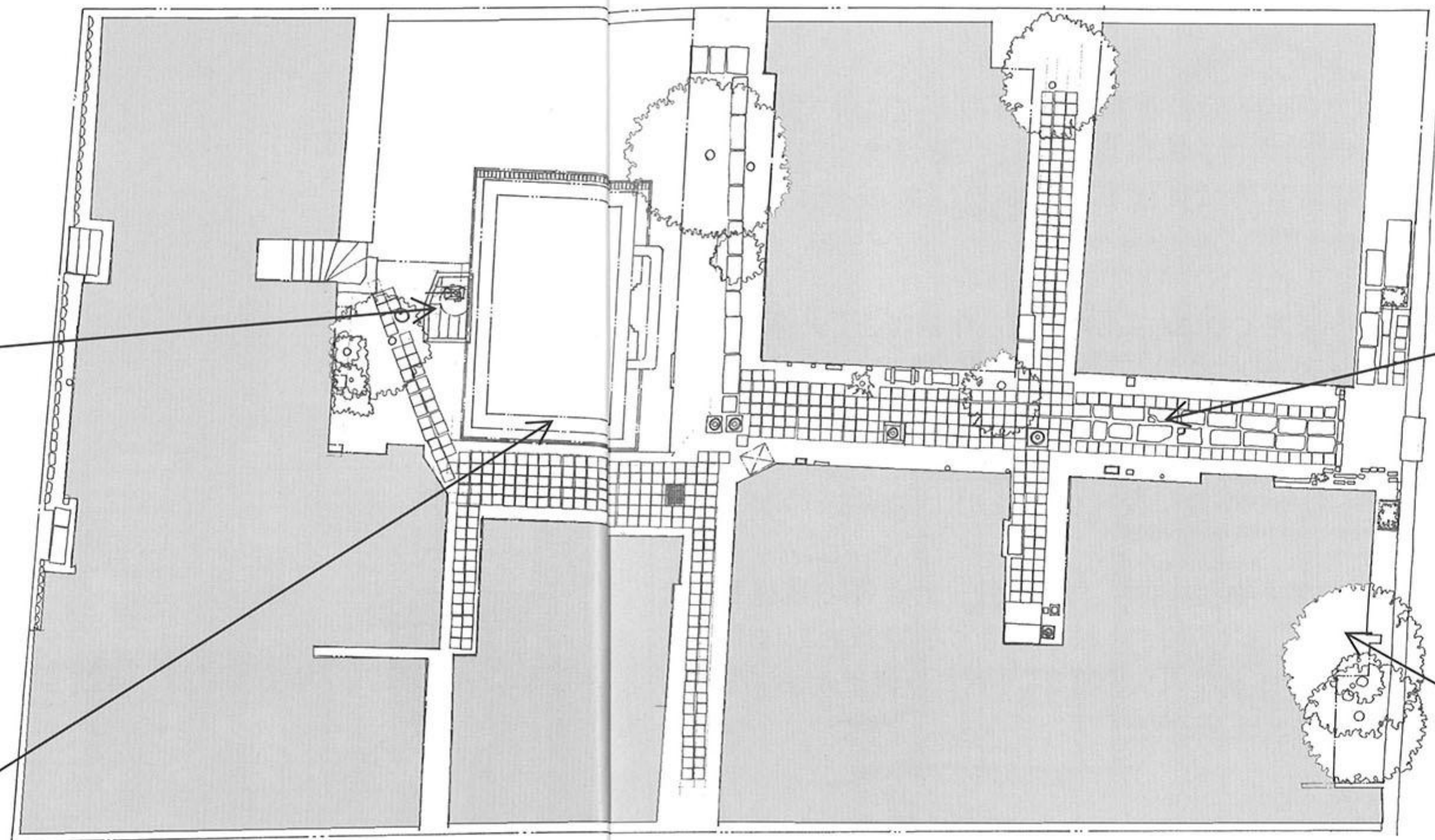
### ■路地と井戸

長屋の敷地は、古代の武蔵野台地が始まる場所で約4.5mのレベル差があります。崖の上と、土蔵がある下の敷地にそれぞれ長屋が建てられました。井戸は共同で使われ、土蔵のある下の敷地の路地が広がったところにあり、崖の上の長屋からは階段を通して井戸が利用されていました。崖の下側には今はありませんが、小さな流れがあり、井戸水とは別に様々な用途に利用されていたそうです。



### ■土蔵の煉瓦

土蔵の基礎を少し掘削した所、外周部に煉瓦が敷かれているのが確認できました。煉瓦の表面は濃い茶色の釉薬状のものが確認できました。明治末期から大正時代には多く作られた「塩焼き煉瓦」の可能性ががあります。「塩焼き煉瓦」は煉瓦を焼く時、塩を撒く事により表面がガラス状の釉薬になるものですが、これも他の事例と合わせ研究する必要があります。今後の研究の為にサンプル1個を保存しています。



### ■路地の敷石

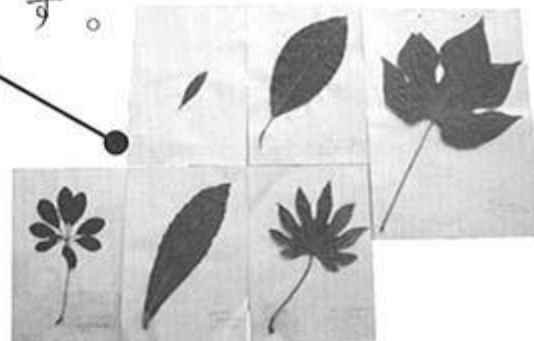
調査では御影石の厚いペーブメントと、300ミリ角のセメント平板ブロックが路地に施されていました。御影石は、都電の敷石を貰ったとお話があり、寸法が470×700程度の寸法なので、それが正しいとすれば



東京市電軌条1372ミリの内部2枚割りの敷石ではなく、軌条の外縁に敷かれたやや幅広の敷石の可能性もあるかも知れません。今後の研究を待ちたいと思います。

### ■路地の植栽

路地には多くの植栽が植えられていました。写真はその葉の標本です。アオギリ、ビワ、ホウノキ、カボック、カキ、シラカシ等です。



[篠田義男]

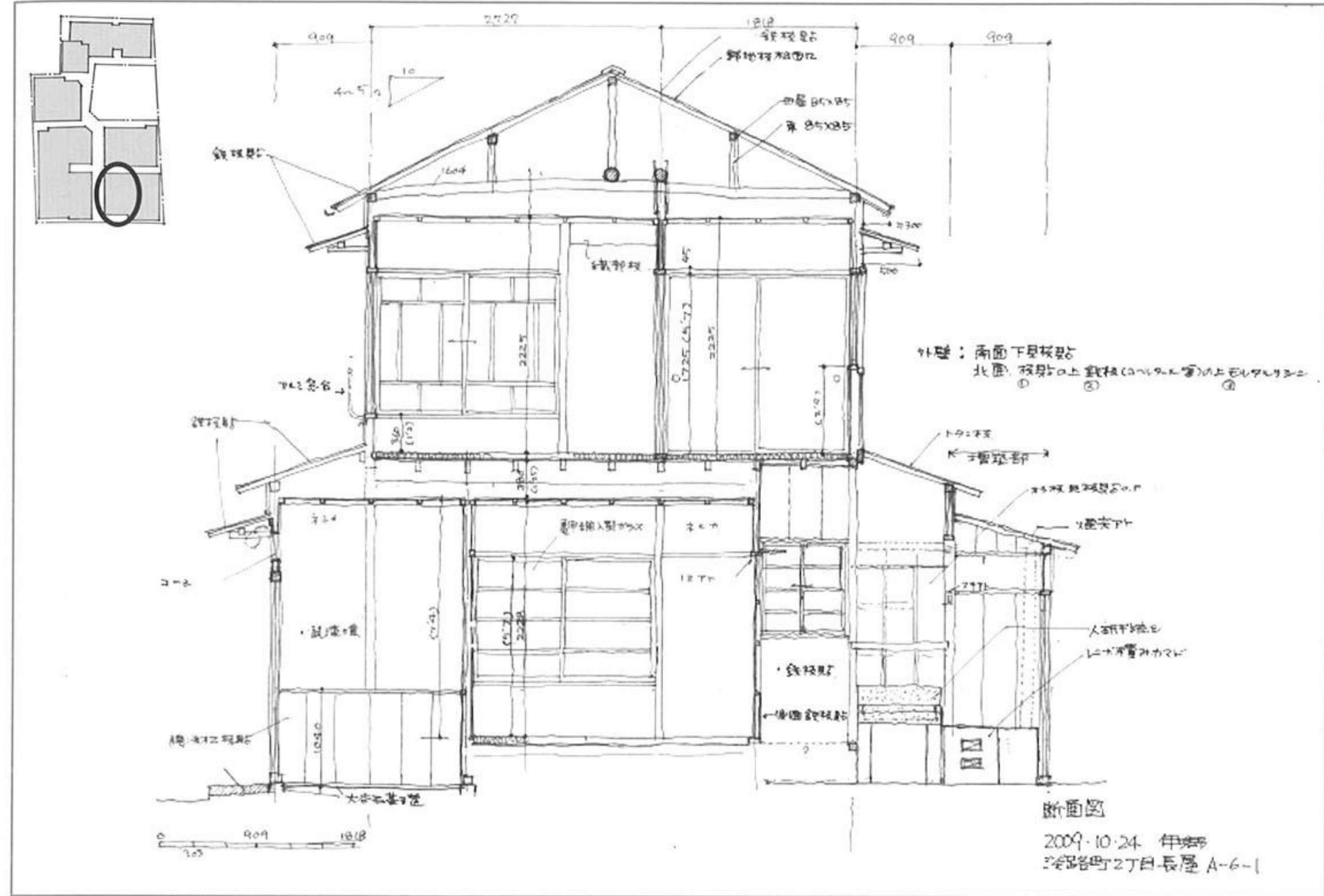


# 小松さんのすまい

小松さんのすまいは、山崎棟梁が最後に建てた同じ平面の長屋4棟8軒のうちの1軒です。この家は改修した部分も少なく、しばらく空き家になっていたため、建築当初に近い姿が残っていました。改修されている所も他の家を参考にすることで、建築当時に復原することが難しくありませんでした。そこで、この家を特に詳しく見てみましょう。[大橋智子]

この長屋は2戸が1棟になったいわゆるニコイチ住宅と呼ばれるものです。外観は、下見板張りで1階に美しい出格子が連なっていました。ただし、道路側以外の3方向の外壁は隣地からの延焼を考慮してかモルタル塗りとしています。また隣家に近い後補のガラス窓には手製の亀甲網入りガラスが使用されていました。これらは当初仕様からの改修と考えられます。関東大震災後、防火構造の規制がしたいにきびしくなり、多くの町家がモルタル塗りの外観に変化しましたが、ここにもその歴史を見ることができます。

内装には米松が敷居、鴨居などの造作材として使われています。また、柱、土台等の構造材にも米松が使用されています。日本では、造作や柱、土台等に米松を使用することはあまりありませんが、関東大震災後には、北米から多くの米松材が日本に入り、手に入りやすい状況があったと考えられます。[伊郷吉信]



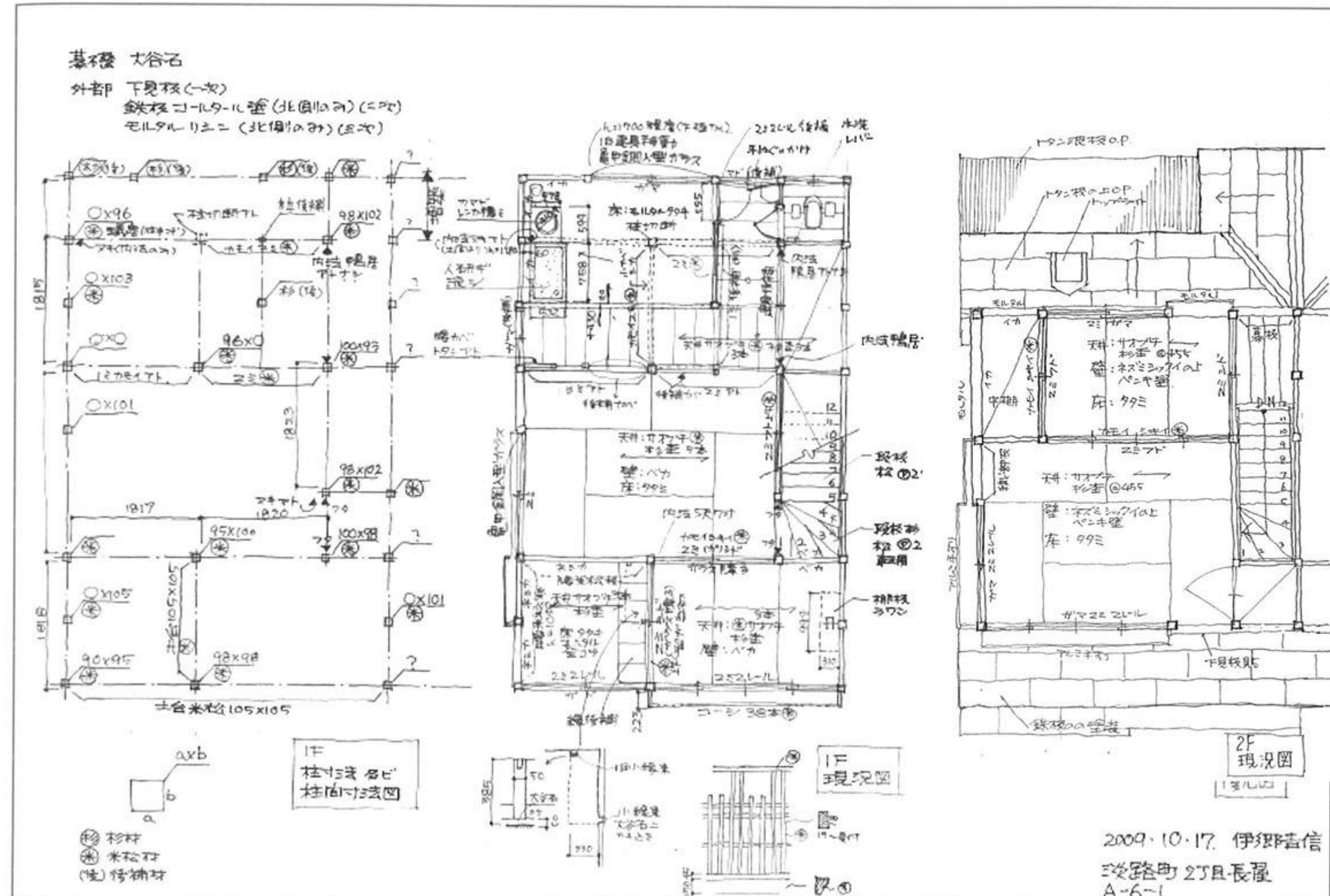


# 小松さんのすまい つづき



モルタルが剥落した下から鉄板が見えています。その下には木製の下見板が残っています。

間取りは1坪の玄関から三畳の部屋があり奥に六畳、台所が並んでいます。柱等に残る痕跡を調査したところ、居間六畳より上がる階段は玄関脇の三畳より上がっていることがわかりました。別世帯がこの家を使用していたことも考えられます。また、当初の台所は一坪ほどで脇に三畳大の部屋がありました。この三畳大の部屋をなくし、北側に増築をし台所を広げています。暮らし方の変化に応じて自由に間取りを変化させていたことがわかります。2階は、三畳と六畳の2部屋があります。六畳はガラス窓が矩折に付き、日当たりがよい住みやすい部屋でした。この六畳の部屋の小壁には織部板をつけ簡易床の間としていました。[伊郷吉信]

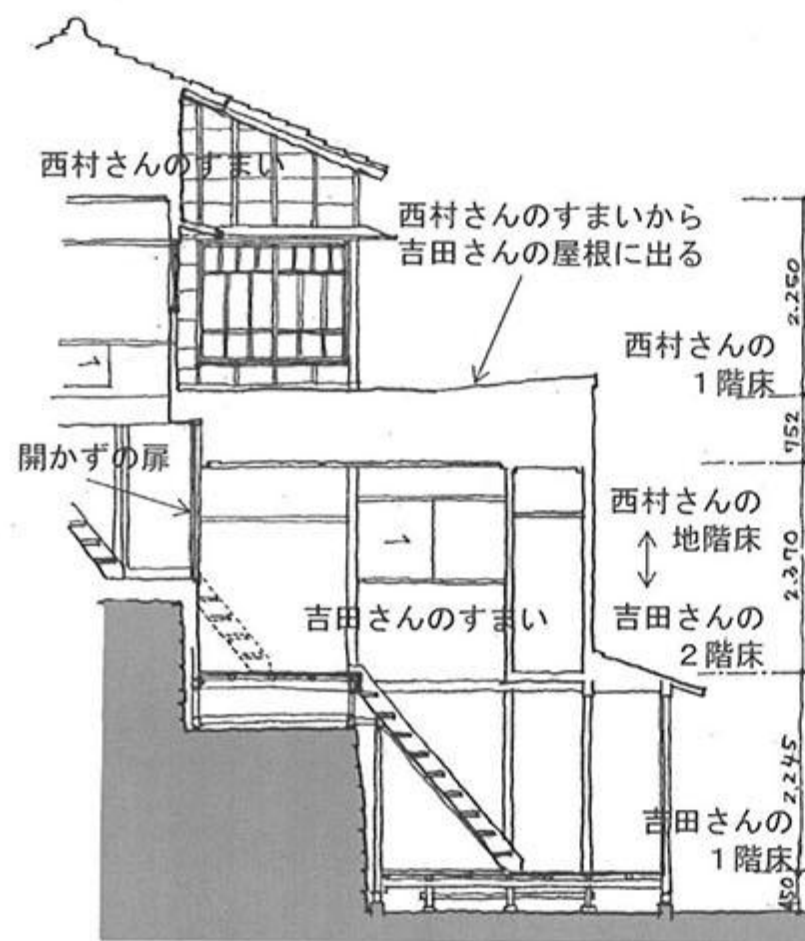




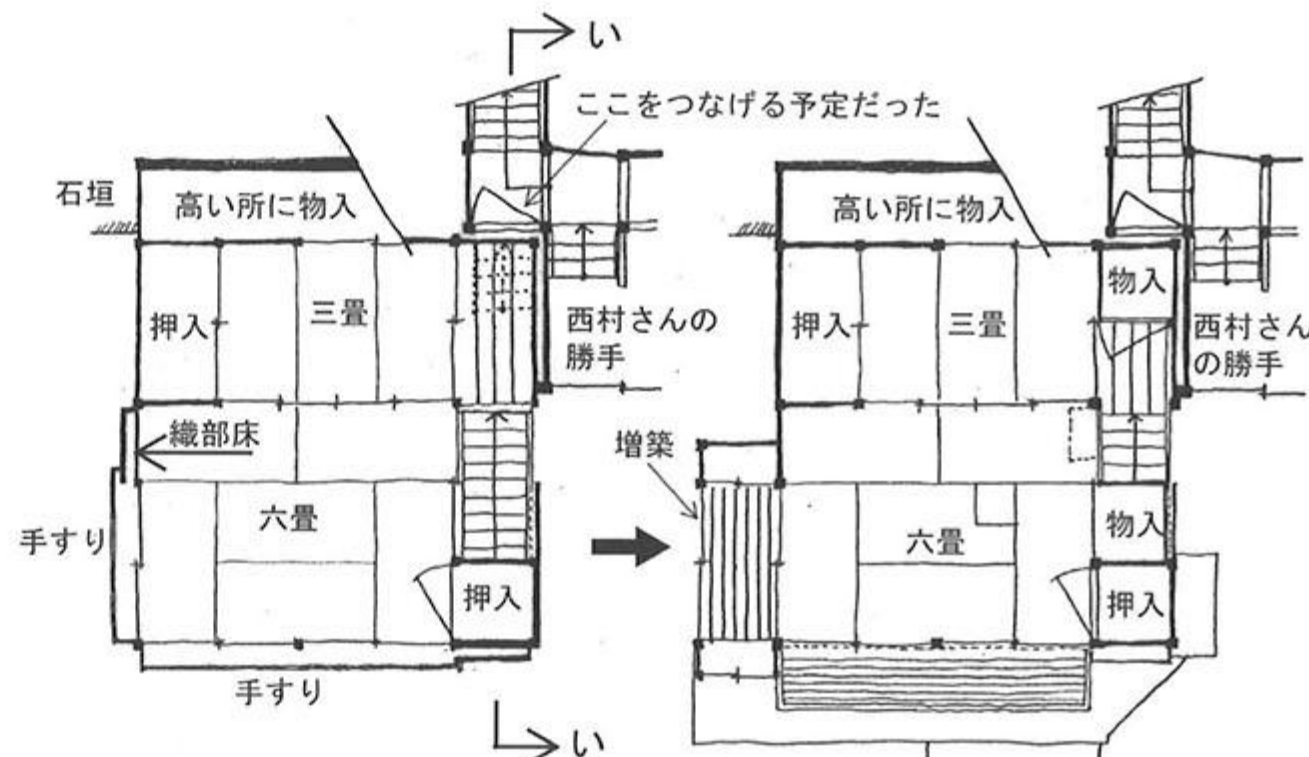
# 吉田さんのすまい



焼け跡に長屋を建てるよう頼まれた山崎棟梁は、お屋敷に残った大谷石の石垣に差し掛けるようにまず、自らが住むためのとても小さな1戸建てを建てました。当初1階には玄関と二畳か三畳の和室と台所を設け、石垣が後退する2階には、和室三畳と六畳間を作りました。石垣に添うようにできた隙間も収納として無駄なく利用しています。一間の押入付き三畳と半間の押入付き六畳間はこの後に連続して建築する長屋建て住宅2階平面の基本となりました。将来、石垣上の家に住みたいという希望を山崎棟梁は持っていたらしい、という話を孫の順二さんはお父さんから聞いていました。今回の調査で、西村さんのすまいの階段途中に開かずの扉が確認出来、丁度吉田さんのすまいの2階壁とつながることがわかりました。しかし、棟梁の計画は、なぜか実現しませんでした。長女が吉田さんと結婚後、この家は、長女家族に譲り、棟梁一家は南に建てた家に引っ越しました。吉田家の子どもたちは男の子5人女の子2人の大所帯でしたが、六畳間に炉を切って茶室とするなど風流な暮らしをされていました。[大橋智子]

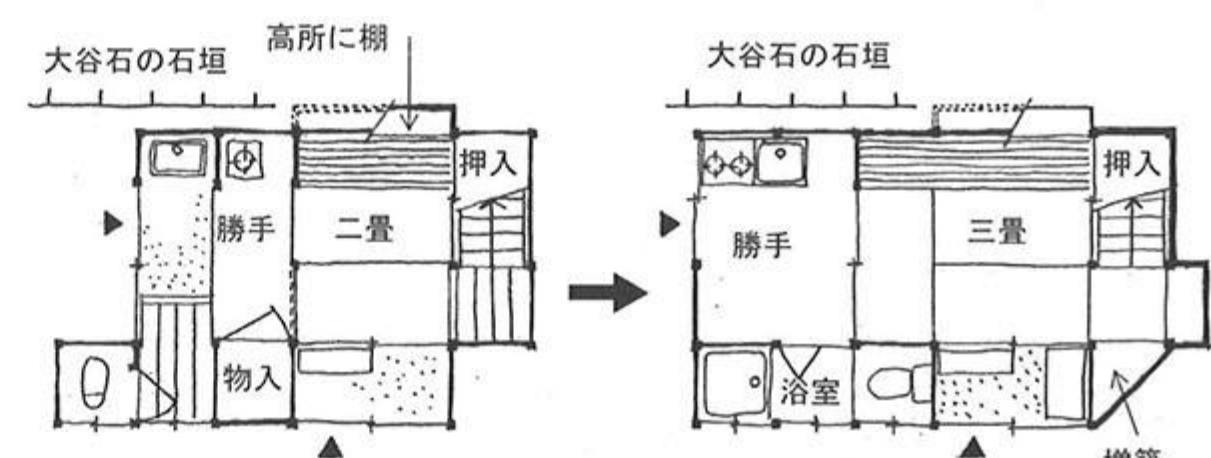


い-い断面図



建築当時の2階平面図

調査時の2階平面図



建築当時の1階平面図

調査時の1階平面図



# 西村さんと池田さんのすまい

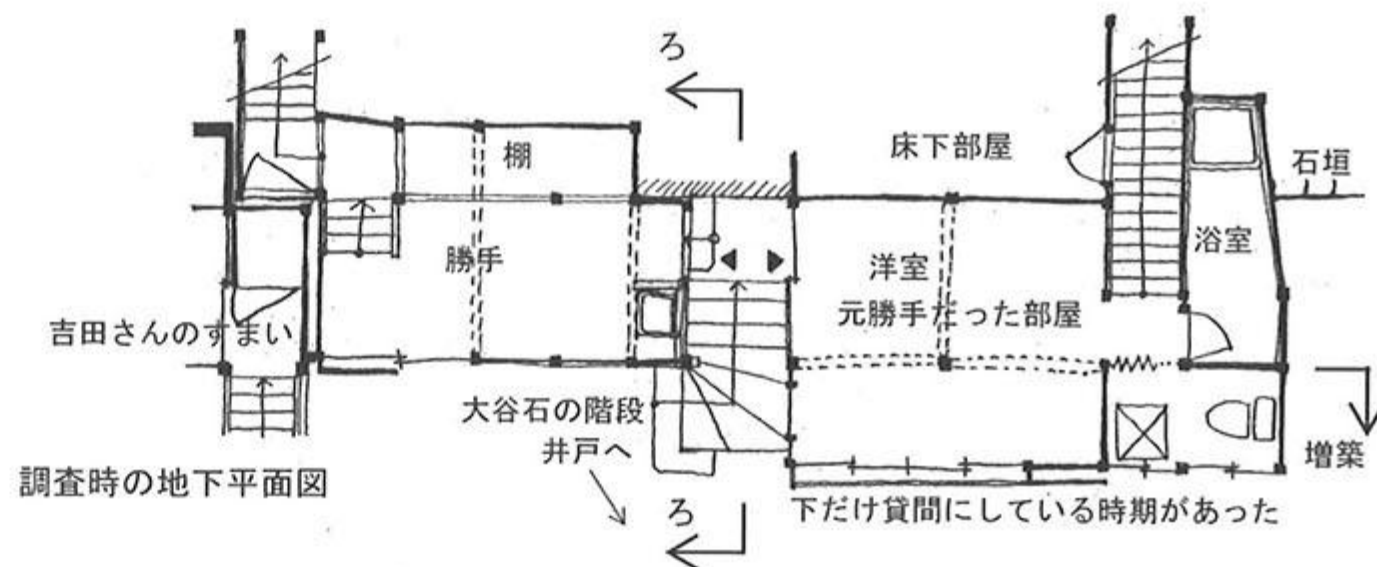
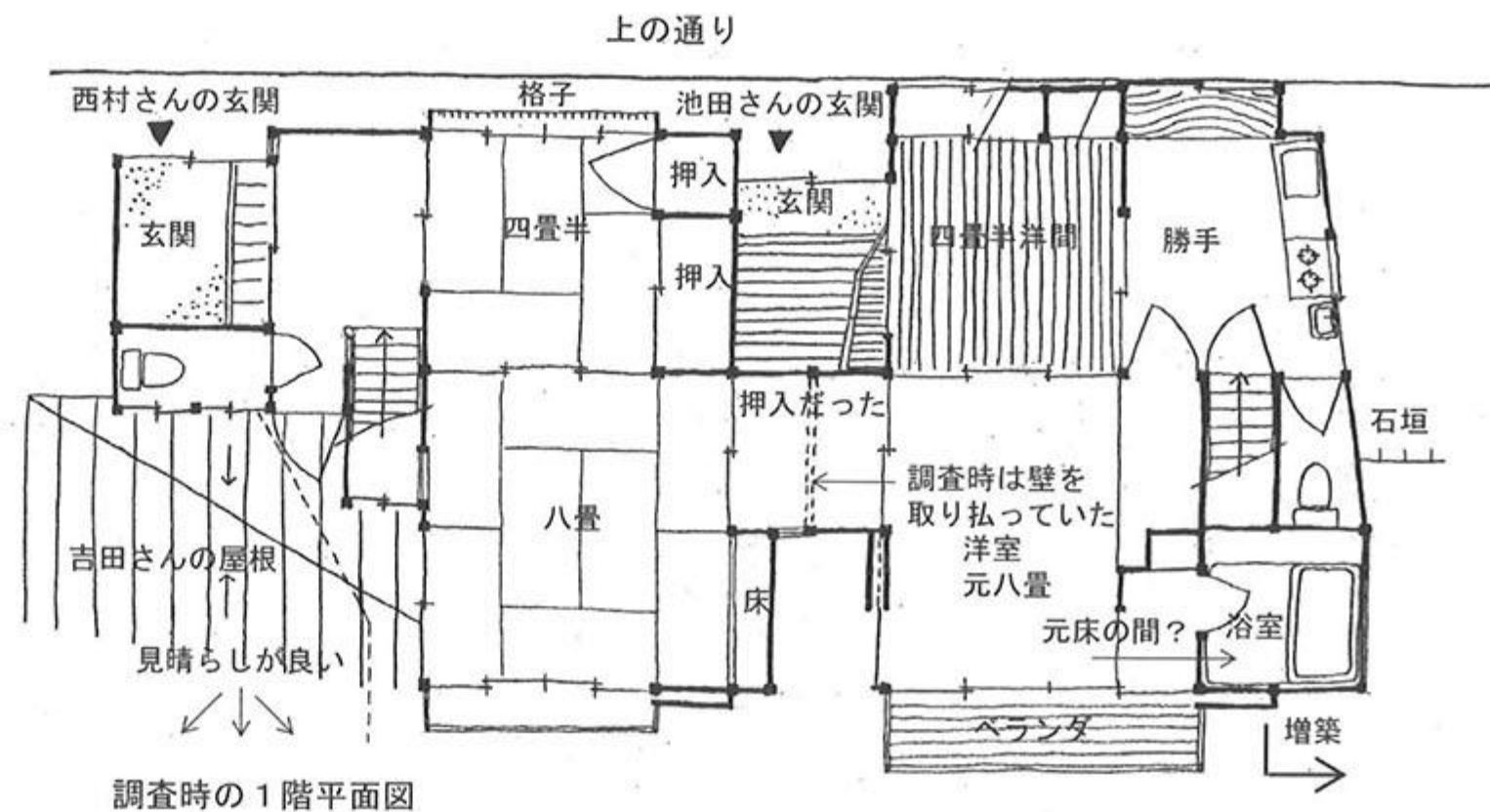
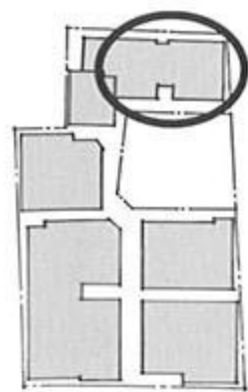


写真提供: 角倉邦良さん

西側からは平屋に見えますが(写真上)  
東側からは2階屋です。(写真下)



吉田さんのすまいと西村さんのすまいが階段でつながっていることが確認できました。吉田さんのすまいの次に建てたのはおそらく上の道に面したこの家だったようです。この2軒の作りは長屋というより、仕舞屋(しもたや)のたたずまいで、千本格子のついた出窓が設けられ、1坪の広さの玄関に四畳半と畳敷きの床の間と押入付きの八畳間が続いています。台所は階段を下りた地下2坪で、そこから勝手口を出て大谷石でできた階段を下りると共同井戸のある所に出ることができます。また、西村さんのすまいの玄関脇木戸を抜けると、丁度吉田さんのすまいの屋根に出ることができ、広いテラスのような場所になっていました。池田さんの住まいも西村さんとほぼ同様な平面です。2軒とも八畳間は日当たりのよいコーナーを二面窓にしています。西村さんのすまいはほとんど改造されていませんでしたが、池田さんのすまいは、お風呂を設けたり、台所を1階に増築するなど、何回か手が入っていて、建築当初の姿を完全復原することはできませんでした。 [大橋智子]





# 山崎さんと内田さんのすまい

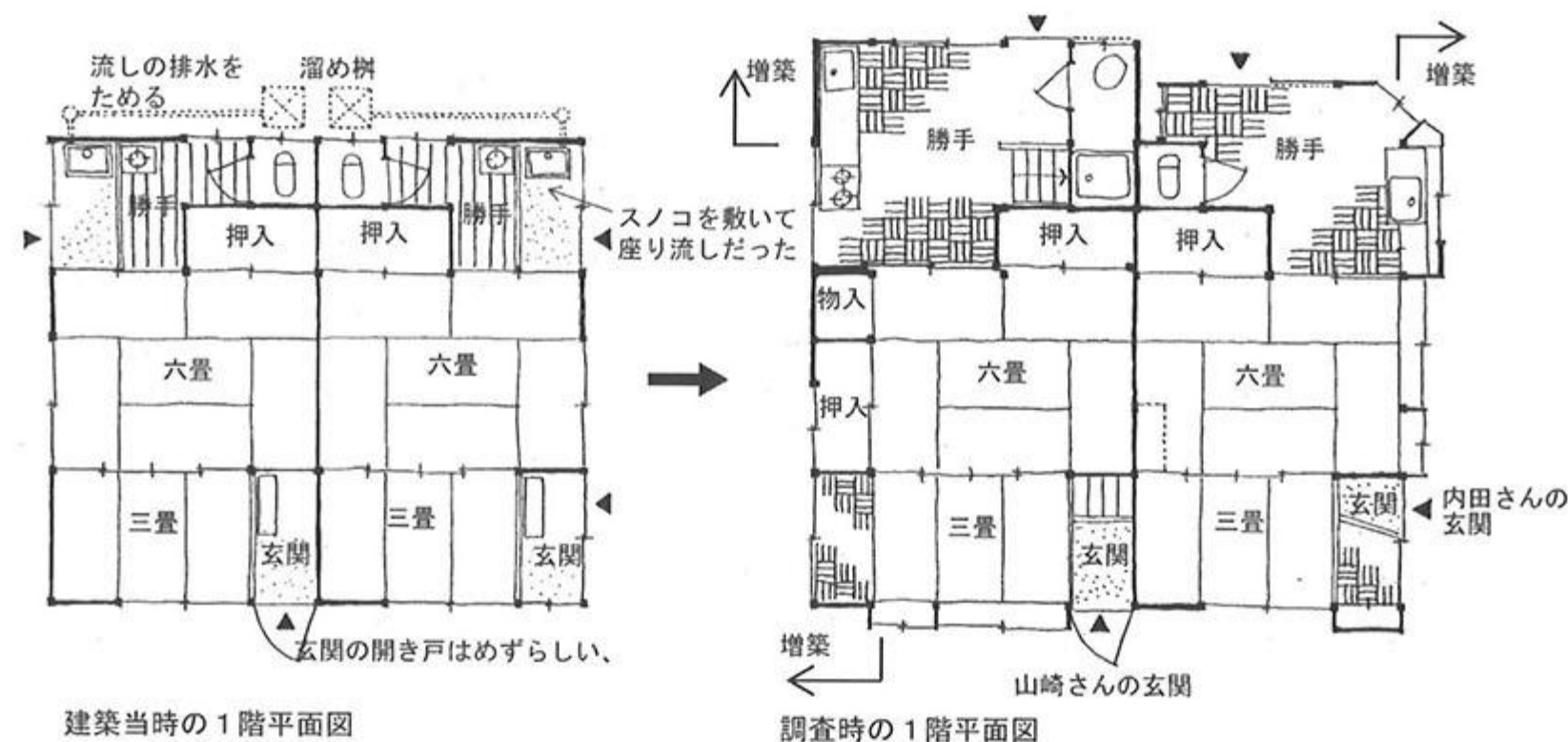
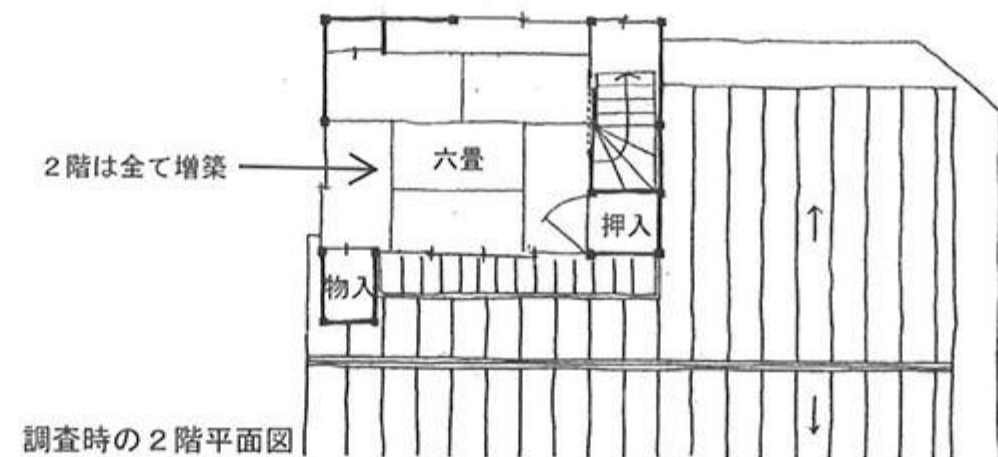
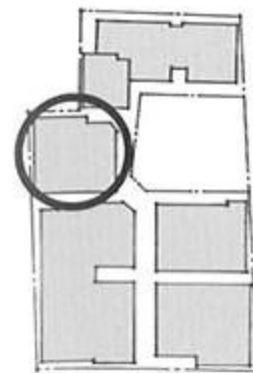


奥に見えるのが増築した山崎さんの2階



内田さんの玄関

当初平屋の二軒長屋で、次に建設される2階建て二軒長屋1階の原型となる平面がこの住居で実施されています。但し、1軒の間口は2間、奥行き3間半という規模であったため、玄関の入り方が変則的で、奥に配置された山崎さんのすまいは、この時代にはめずらしい片開きドアになっています。山崎さんの家族構成はおじいさんの山崎棟梁が亡くなった後、祖母、両親、子ども4人と大家族であったため、1階の増築だけでは足りなくなり、昭和43年頃に2階を増築しました。一方手前の内田さんは、お話を聞いたお嫁さんが世田谷東玉川から嫁ぎ、昭和25年頃ここに移り住んだ時には、両親、弟と同居しました。郊外に比べてすまいの狭さに驚いたけれど、ガスコンロがあったことがうれしかったそうです。東京でも下町と郊外の差がわかる面白いエピソードです。台所は土間にスノコを敷いた座り流しで、一段上がった板の間にガスコンロが置いてありました。内田さん夫妻には男の子がひとり生まれましたが、玄関の間の三畳に親子3人、六畳に両親と弟が寝ていたそうです。増築は台所を広げた程度でした。[大橋智子]





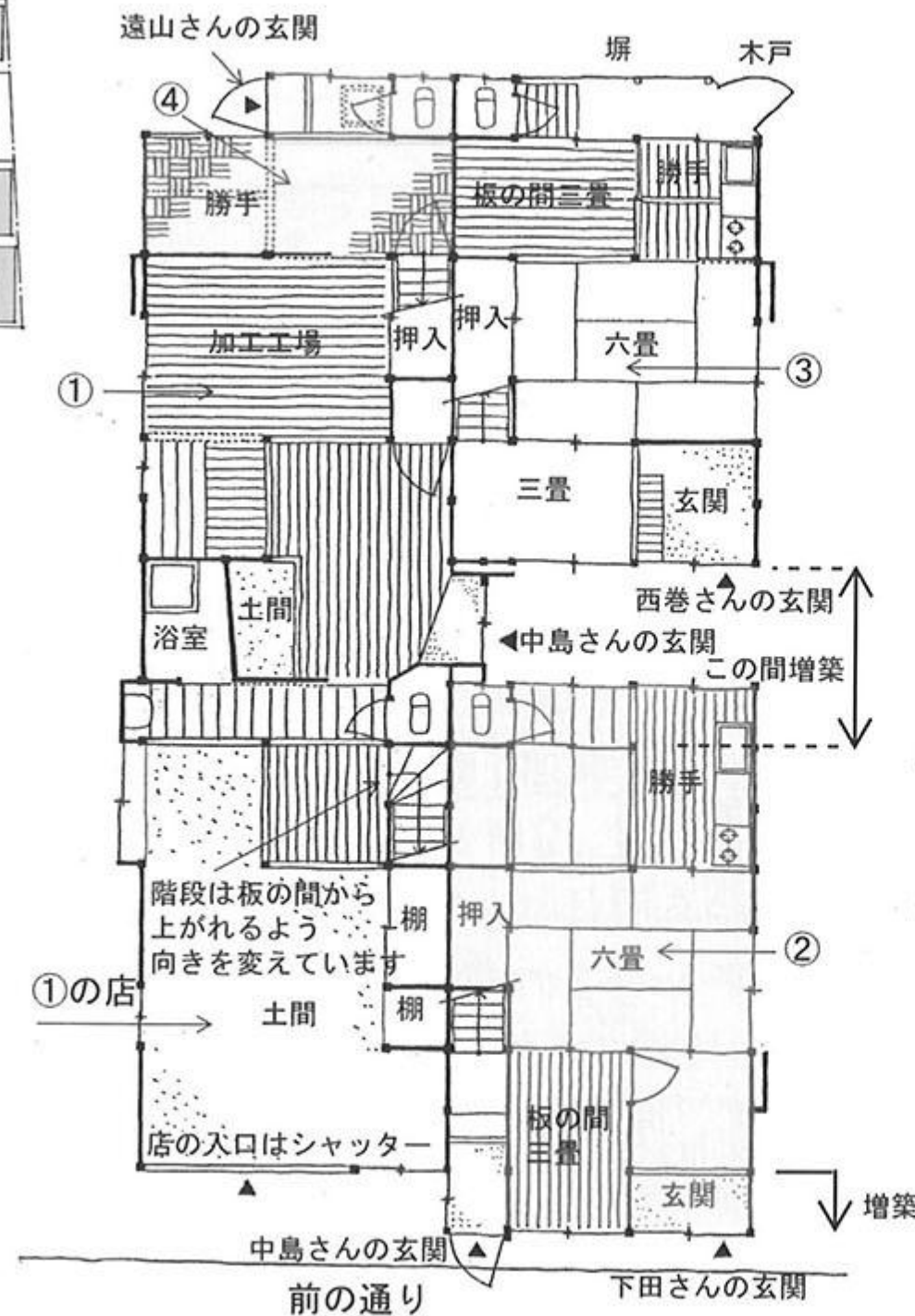
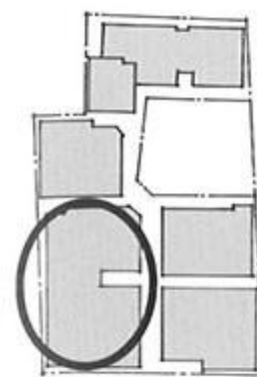
# 中島さんのすまいと店

## + 下田さん、西巻さん、遠山さんのすまい

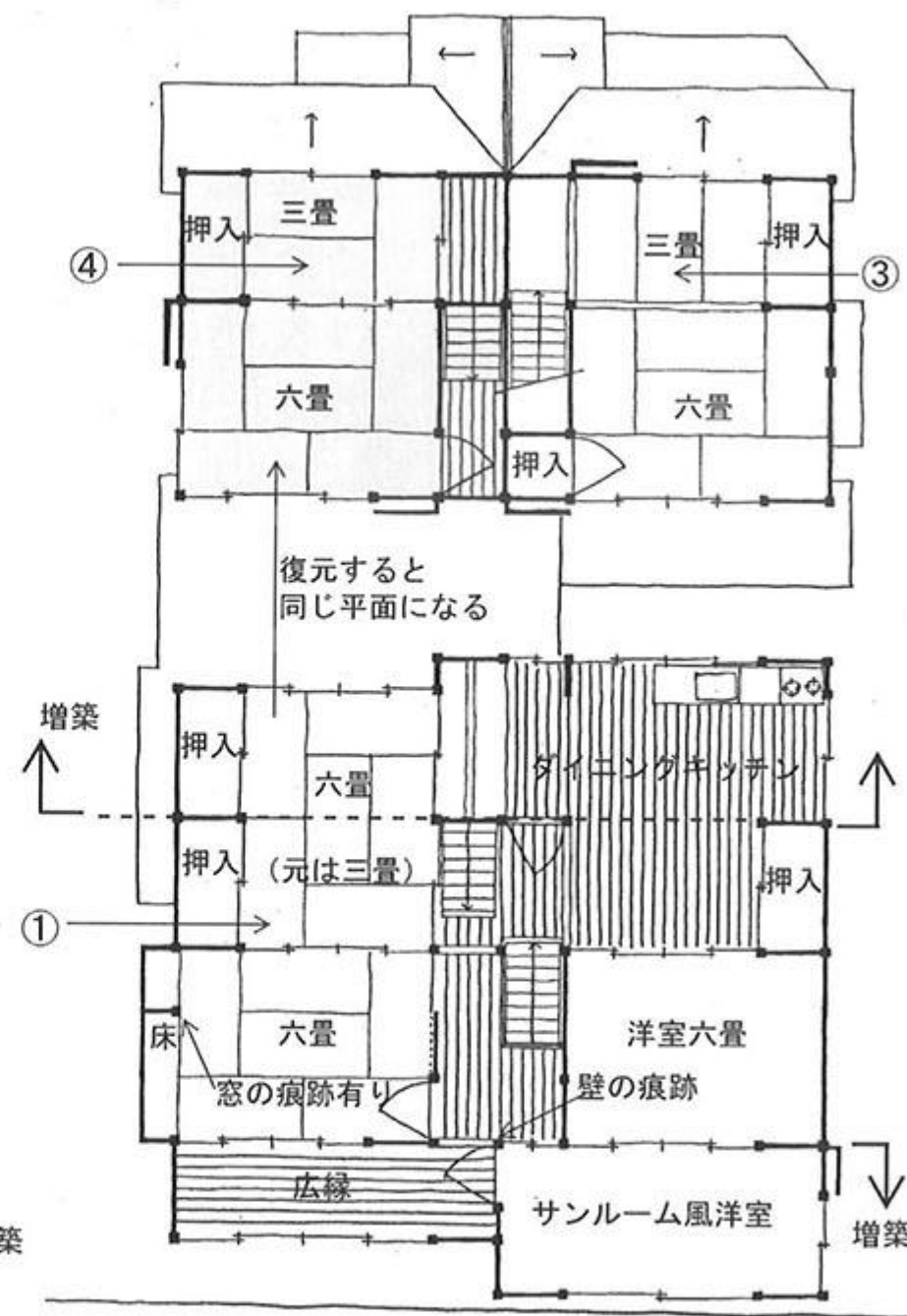


西巻さんのすまいの北西面

このすまいは、元々同じ平面の二軒長屋が2棟あったものを、増築を重ね1棟のすまいと店にしたもので、戦後から高度成長期にかかる生活の様子を垣間見ることができます。①はこの2棟の持ち主、中島さんのお父さんが布加工の工場と店舗を営んでいたところです。表の道路に面した1階部分は1坪の板の間を残し、全て土間に改造して、事務所として使っていました。その奥は増築して奥の建物とつなげ、和室六畳は布加工工場として使っていました。南棟の2階は二軒長屋を横につなげて台所を設け、家族のすまいとなっていました。和室は六畳二間続きとし床の間も設け、南にサンルームの増築を行っていました。商売の羽振りの良さが現れています。②部分は1階のみを下田さんに貸していて、両親と子ども4人が住んでいました。南北半間ずつ増築を行っていました。2棟目の③部分は、1、2階共ほとんど改造が行われていません。両親と子ども3人家族の西巻さんに貸していましたが、引っ越した後は長い間空き家になっていました。④部分は路地奥の台所から2階に上れるよう階段の向きを改造し、1階の台所と2階和室を昭和40年頃まで3人家族の遠山さんに貸して使っていました。 [大橋智子]



調査時の1階平面図



調査時の2階平面図



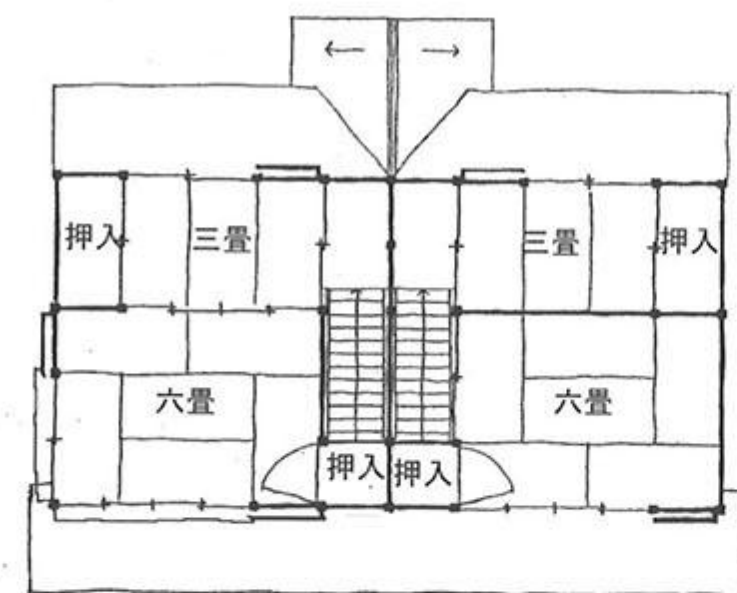
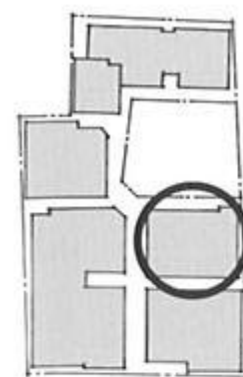
# 角倉さん(脇田さん)と岩堀さんのすまい



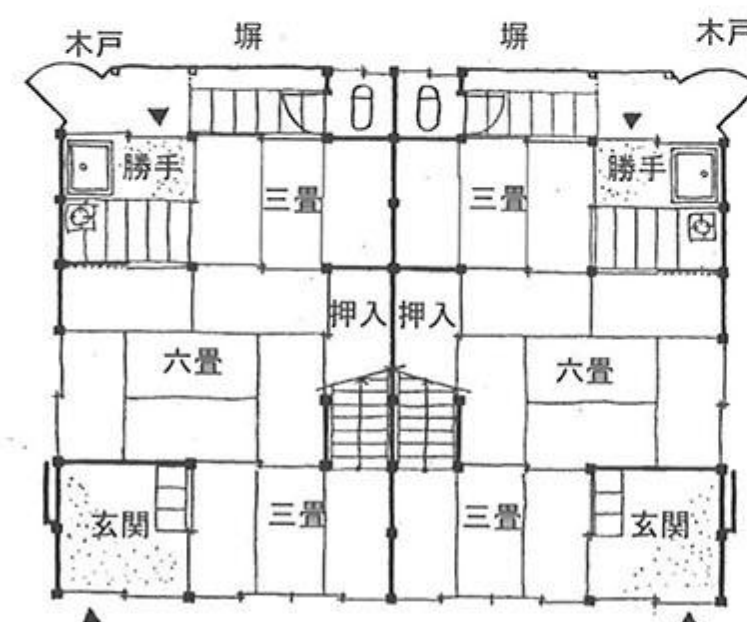
白く見える外壁が増築部分



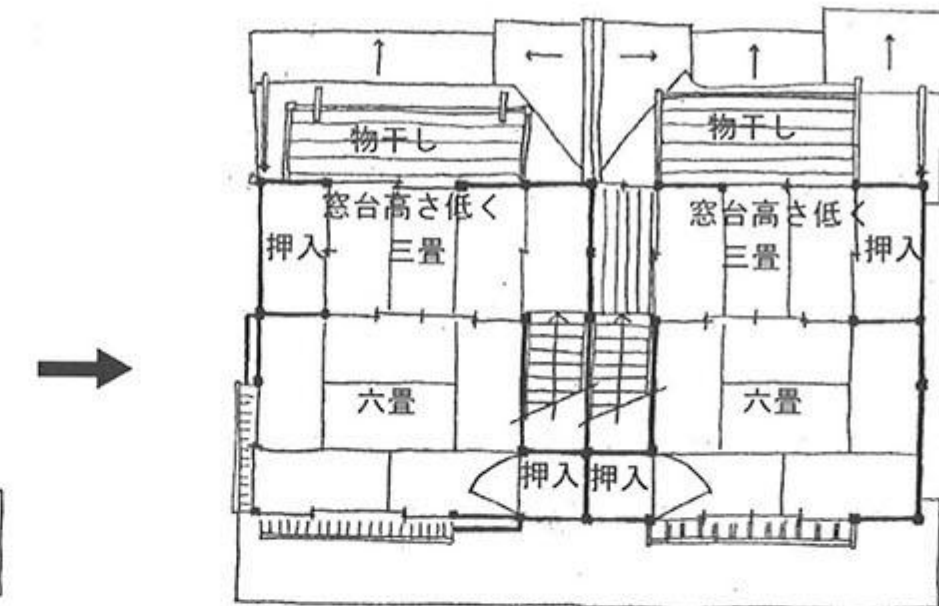
敷居跡や貫跡から復原すると小松さんと安部さん、中島さんのすまいと全く同じ平面の2階建て二軒長屋だったことがわかります。調査時には左側のすまいは脇田さんから角倉さんが借りていて、1階奥の三畳間の一部にはユニットバスが設置してあり、台所は屋根から採光を取ってありました。1階は全て現代風に畳をフローリングに張り替えました。右側の岩堀さんのすまいは玄関と玄関脇三畳の位置を反転させ、玄関から直接2階に上るようにして、各室に独立性を持たせました。玄関ドアを開き戸にし、浴室も設置してありました。どこの家も増築をして、広さを求めるだけでなく、内風呂、部屋のプライバシーなどが必要とされていくのは時代の流れです。2軒とも2階はほとんど改造されていませんが、北側の窓台高さを低くして、物干しを設けています。一間の押入付き三畳間と半間押入付き六畳間です。2階の東南角を二面窓にするのは、どの建物も共通で、棟梁の好みだったようです。脇田さんは、両親と男の子が2人、角倉さんは両親と男女2人の子どもが暮らしていました。岩堀さんは両親と子ども3人(男2人女1人)の家族でした。 [大橋智子]



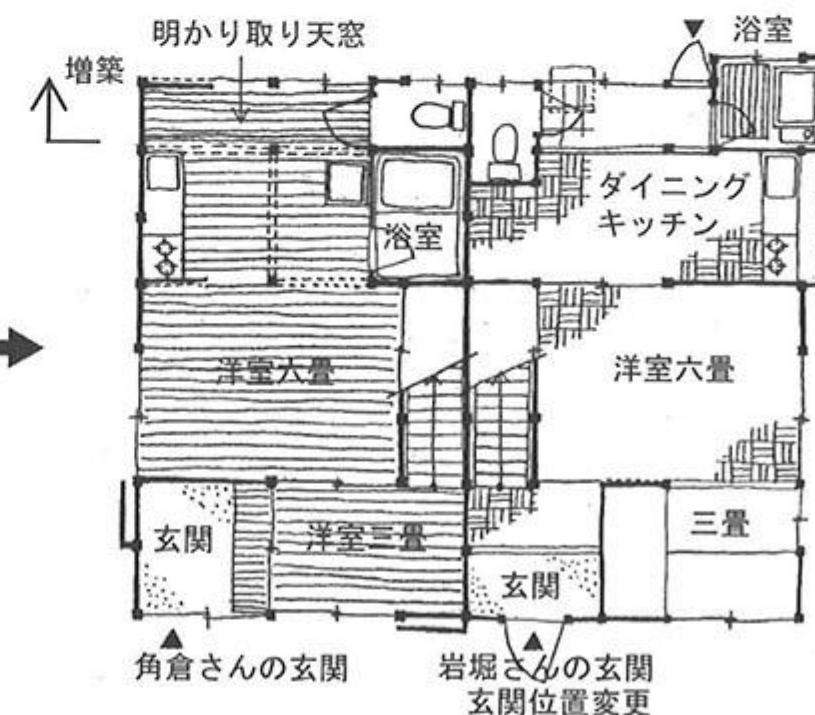
建築当時の2階平面図



建築当時の1階平面図



調査時の2階平面図



調査時の1階平面図

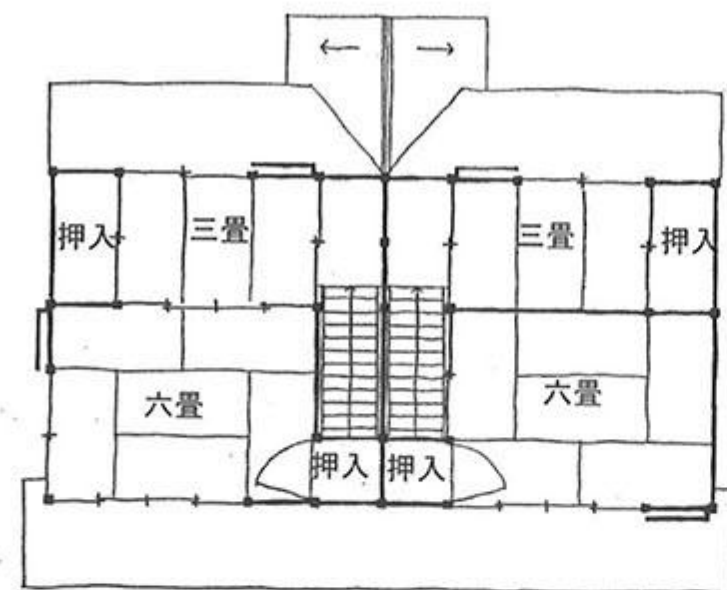


# 小松さんと安部さんのすまい

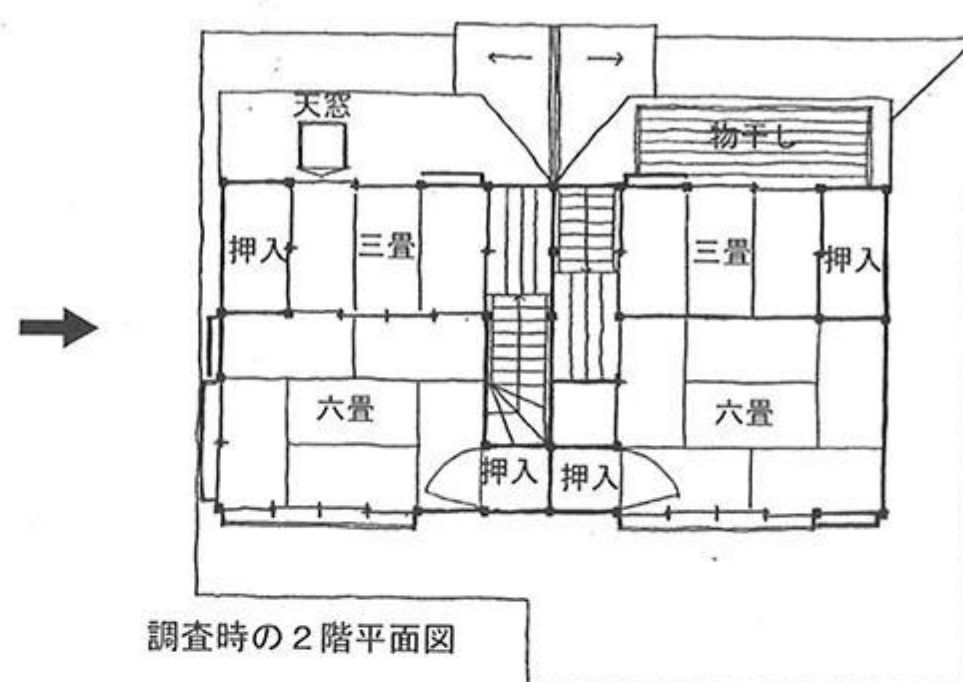


小松さんのすまいは16~18ページの詳細解説にあるように、建築当初の姿をよく残していただけでなく、すまいの調度品なども多く残されていました。そこには、桐箆笥、茶箆笥、仏壇、足踏みミシン、蓄音機、柳行季など家具類の他、長持ち、紅白の漆盆なども含まれ、この家の夫人がお嫁入り道具として持参したのではないかとと思われる品々もありました。これらは昭和の生活史を知るための貴重な品々でしたが、残念ながら多くは処分されることとなりました。玄関に貼ってあった町名の入った青いホーロー鉄板は保存してあります。

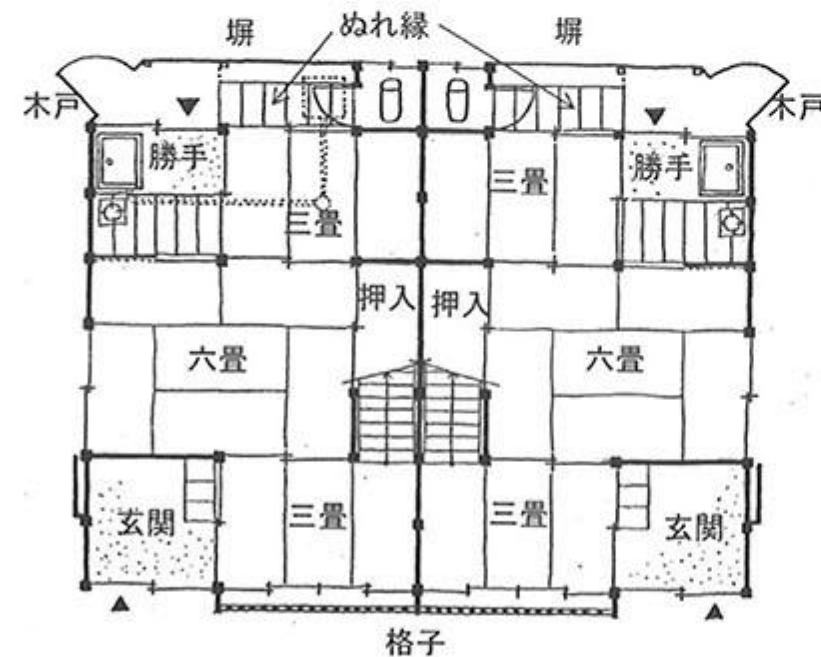
お隣の安部さんのすまいは、1階を大きく改修と増築を行っていました。おばあさんの話によると、軽自動車を買った時に車庫を作るため、道路側に半間建て増しを行い、玄関と三畳間を改修したということです。その後、車が大きくなり、別に車庫を借りることになり、また部屋に戻したのだそうです。また階段の上り方向を変え、各室に独立性を持たせています。階段板やささら板は上手に古い材を使い回しています。昭和の大工さんは無駄なことはしないのが常識でした。[大橋智子]



建築当時の2階平面図

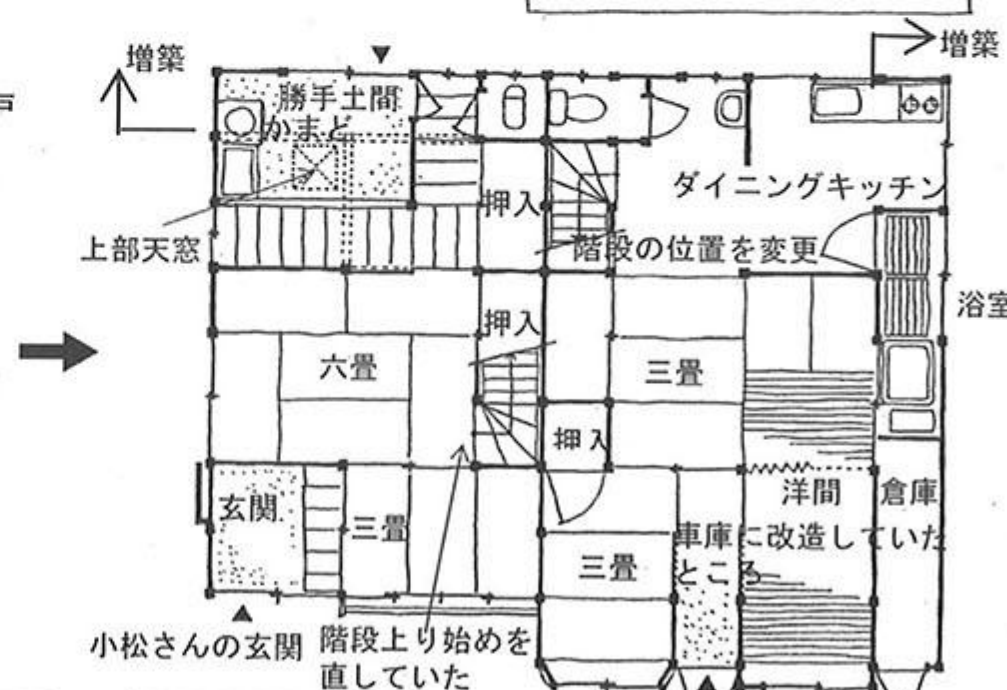


調査時の2階平面図



前の通り

建築当時の1階平面図



前の通り 安部さんの玄関

調査時の1階平面図



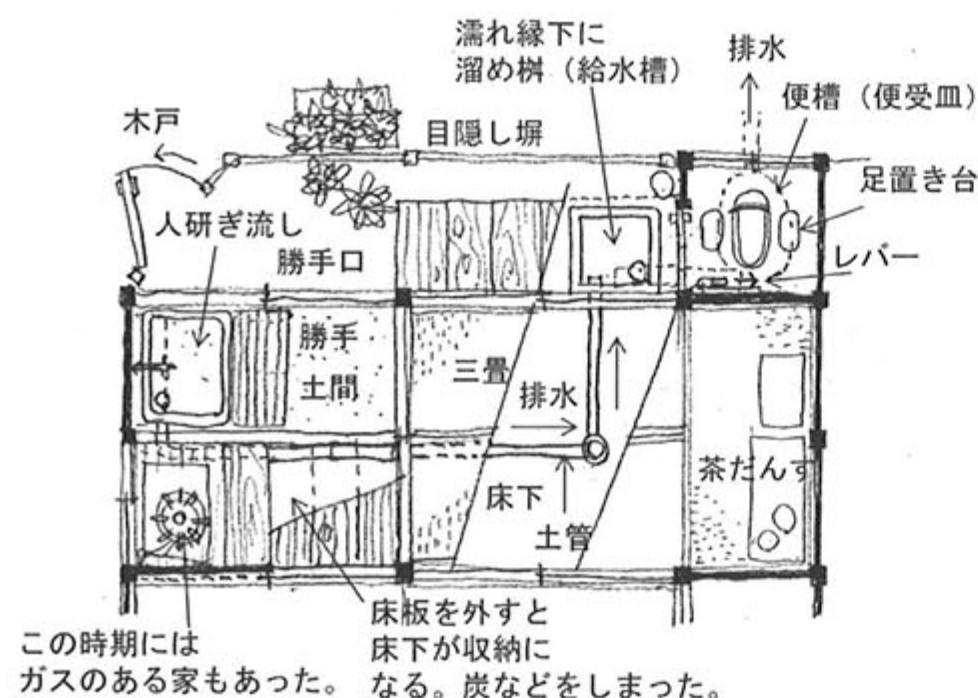
# 排水利用の水洗便所がありました

今回の調査では、特異な水洗システムの遺構が確認されました。台所などの雑排水を利用して、便所の水洗に利用する仕組みです。この形状や構成は、昭和15年中より実施された東京市下水課案にほぼ一致するといえます。当時は原則として水道栓の新設が許されておらず、資材の関係で私設も難しかったために考案されたそうで、昭和16年中には実施数500を数えたといわれます。その幾つかが、つい最近まで機能し続けてきたことは、奇跡的ではないでしょうか。

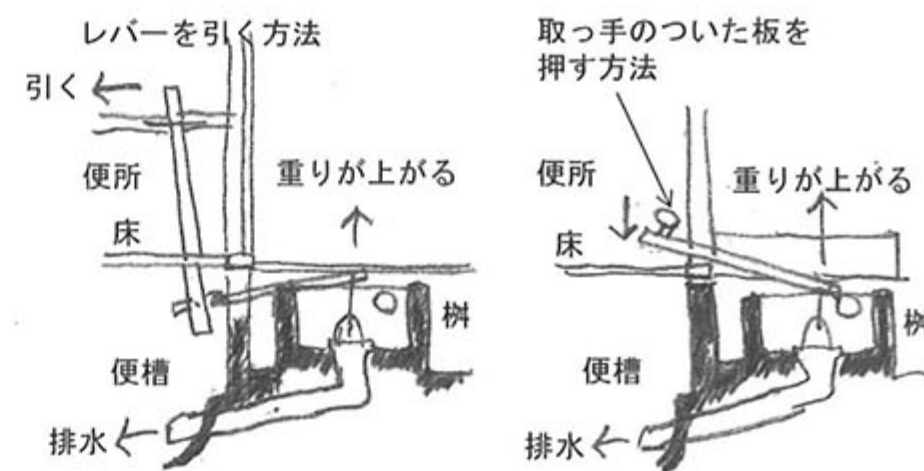
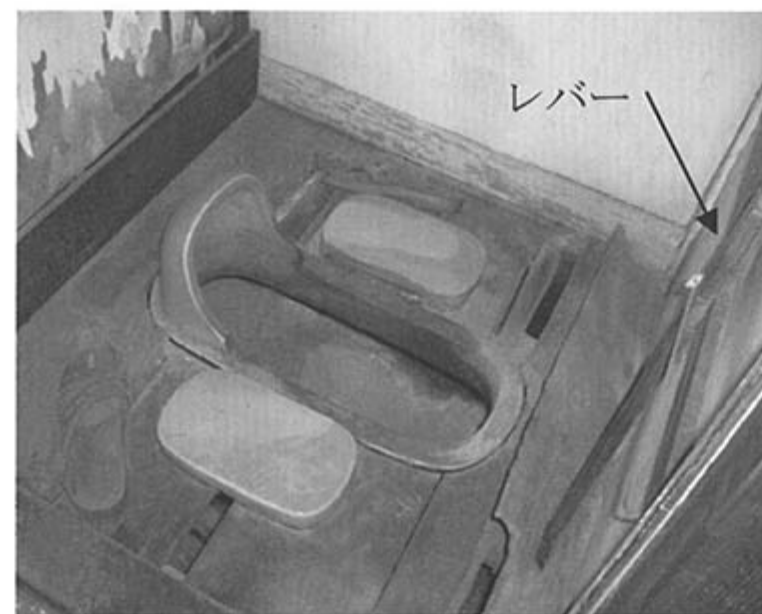
東京市街地における便所の水洗化が盛んになるのは大正半ばからです。大正10年、浄化槽による水洗汚水の浄化が義務づけられたほか、翌11年には三河島下水処理場の建設で、浄化槽の要らない下水道直結の水洗化が下町を中心に進みます。さらに、汲取便所については、新設が12年1月より、使用が17年4月より禁じられるのです。この規制の対象は、日本橋区全域と、麴町、神田、京橋、芝、赤坂、牛込、本郷、下谷、浅草区の一部。淡路町も含まれていました。苦肉とも思える東京市下水課の考案には、そうした背景があったのでしょう。遺構からは、戦中の厳しい時代にも拘わらず、生活用水の有効利用で、水洗化に対応した市民の努力と意気込みが偲ばれます。

[安野彰]  
大泉博一郎『便所の研究』土木雑誌社 昭和17年  
『衛生工業協会誌』第10巻第8号 昭和11年8月

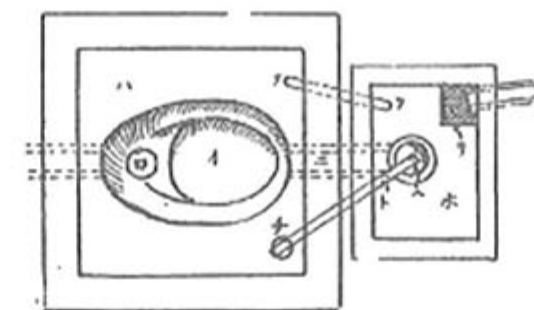
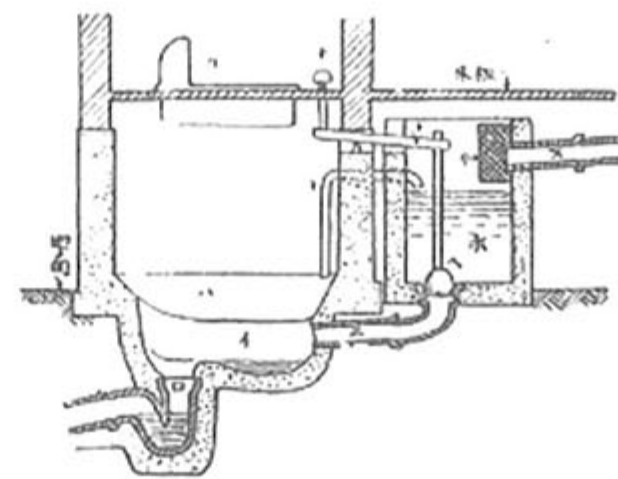
床下に残っていた溜め舂(給水槽)



排水利用水洗便所平面図



淡路町の長屋に残っていた  
梶子を利用した排水装置二種



- イ 便受皿、ロ 持便孔、ハ 周囲セメント塗り、
- ニ 排水管、ホ 給水槽、ヘ 排水管、
- ト 梶子、チ 押ボタン、リ 扉除脚、
- ヌ 給水管、ル きんかくし、ヲ 排水管

廃水利用水洗便所(東京市下水課案)  
昭和15年頃  
「便所の研究」大泉博一郎著より

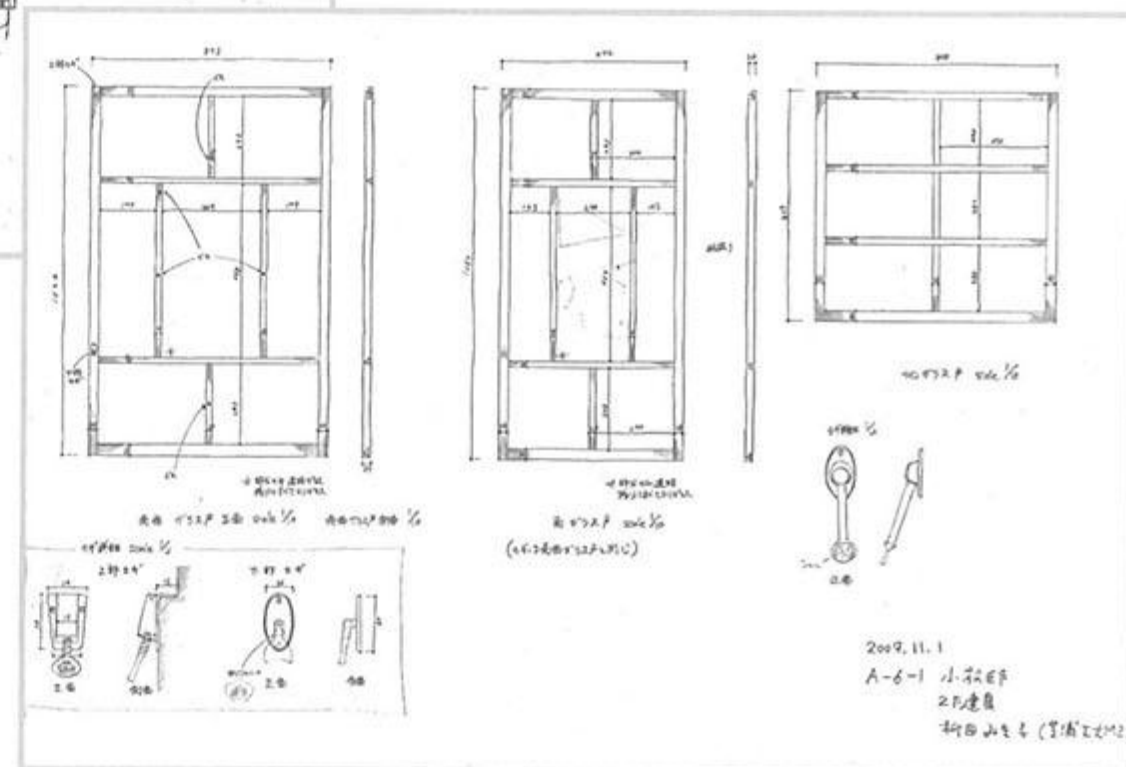
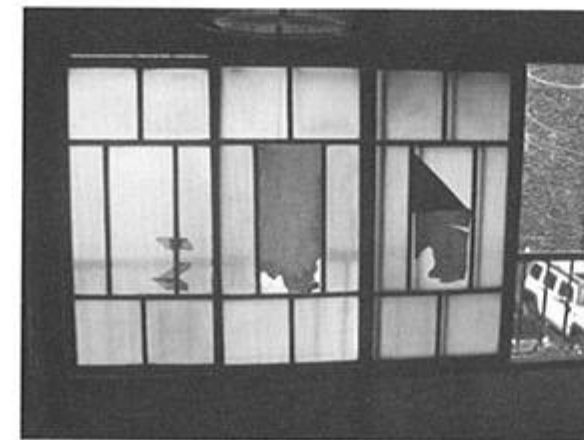
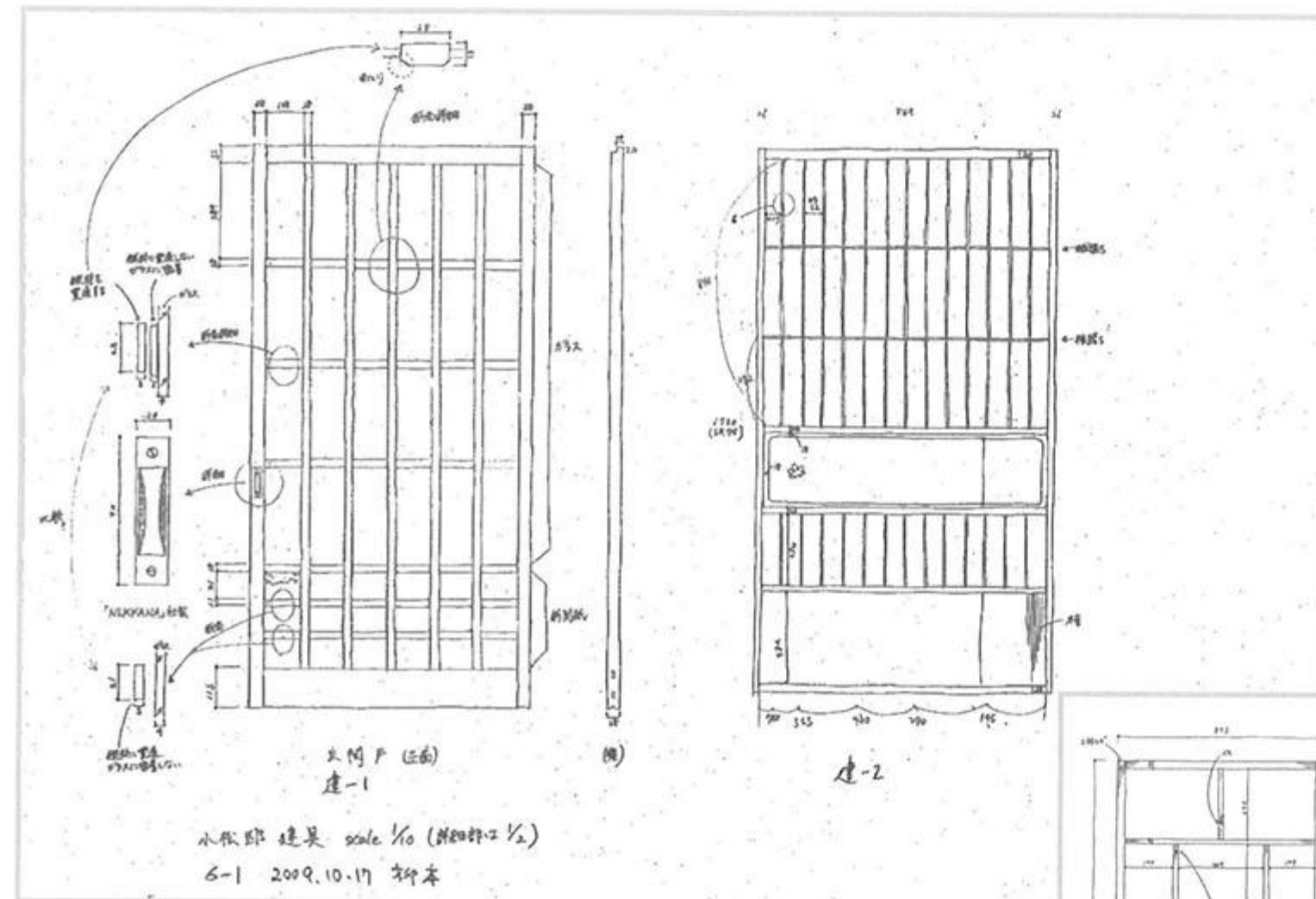


# 小松さんの家の建具 ガラガラと玄関の格子戸を開けて...

アルミサッシが席卷するまで、昭和の住宅の建具は、ほとんどが木製建具で、それも棧戸(さんど)というタイプの、框組みの中を組子で補強したものでした。淡路町の長屋でも、小松さんの家には、アルミに取り替えられないで木製の建具が残っていました。

まず玄関。開けるとガラガラと懐かしい音がするガラス入りの格子戸、全体に少し華奢な木割りの連子(れんじ)格子です。連子の横棧(貫といいます)の下のほうが細かいのは、モノがぶつかりやすい下部のガラスの保護、力のかかる部分でがっちり補強するため、それに、引き戸は下が重い方が滑らかにあけたてできるのです。小松さんの家の障子の下部が板なのも同じ理由。「腰板付き中窓障子」で、真ん中よりやや下にガラスが嵌っています。座った人からは、玄関から入って来た人と視線を合わせず、まず、腰の帯からネクタイの胸元辺りが見える、そんな昭和の光景を想像してください。

ガラス窓は、縦棧(束といいます)を互い違いにして、真ん中に透明ガラス、周囲をすりガラスに割り付けています。ガラスの固定は、パテや押し縁でなく、「貫抜き」というビス止めの手法でスッキリとしています。今のクレッセントと違って、真鍮製の「ねじ締め」がついています。ガタガタとガラス戸を揺らす音を立てながら、ねじ込んだ感覚を思い出す人も多いでしょう。[市川達夫]





## 土蔵のある長屋

お屋敷の土蔵が震災の火事に焼け残って、2000年頃解体されるまで、そのまま使われていました。震災直後、鳥越の自宅から真っ先に駆けつけた棟梁は、山岡さんのモーニングや衣類などを屋敷から土蔵に避難させました。その後、大規模な火災により木造家屋はほとんど焼けてしまいました。震災後は、差し掛け屋根を掛けてしばらくそこに住みながら、家を建てていきました。長屋ができた後は、何回か持ち主が変わりましたが、富士見町の会社が持っていた頃は、社員が住んでいたこともあり、解体前は角の商店田村さんが使っていました。戦後の物が無い時代は蔵の回りを畑にしていた時期もあったそうです。聞き取りをした山崎さんが子どもの頃は、蔵の前に縁台を出して涼んだり、子ども達の遊び場になっていました。[大橋智子]



土蔵の跡地



写真上:震災直後の土蔵  
左奥に見える石垣の上に西村さんのすまいが建つことになる



写真右:土蔵の前の縁台で(昭和25年頃)  
写真提供:山崎順二さん



## 淡路町長屋周辺のあれこれ

■ 岩崎邸の赤煉瓦塀・・・長屋の少し北から西にかけて、三菱財閥の岩崎弥之助(弥太郎の弟)から、その子小弥太に引き継がれた広大な屋敷がありました。神田川に沿って淡路坂がありますが、その南側一帯、最近まで日立本社だったところですが、その東端に、明治期以来の赤煉瓦積みの塀が残っています。[市川達夫]



■ 山田さんのすまい・・・再開発区域の南端のあたりに、「山田さんのすまい」がありました。長屋と同時期に建てられた木造2階建てで、同じような下見板張りの外壁。小規模ですが、内部の造作はなかなか凝っていて、違い棚や透か欄間のある仏壇置場がありました。床下には穴倉がありました。平時は貯蔵に用い、火事の際には財物を埋めて守るためのものと思われる。[市川達夫]



写真提供:角倉邦良さん

■ 高畠さんの家・・・長屋の西側に、高畠さんというお宅があります。石積みの高い擁壁の上に塀をまわした中に昭和初期に建てられた入母屋屋根の2階建ての立派な家です。病院や邸宅などが混在したかつての淡路町の雰囲気、今なお伝えてくれる数少ない現役の建物です。千代田区の景観まちづくり重要物件に指定されています。[市川達夫]



■ 田村さんの家・・・淡路坂を曲がると真っ先に目に付くのが、金木犀の木に覆われた角地のこの家でした。燃料屋さんを営んでいて、2階がすまいとなっていました。元々大工の棟梁が自宅用に建てた家を田村さんが買ったということで、2階の和室は凝った作りになっていました。木造和風建物と、鉄骨とコンクリートでできたモダンな付属屋、木造トラス構造の倉庫の3棟の建物がありました。[大橋智子]



■ 淡路小学校/淡路公園・・・淡路小学校は、東京市震災復興小学校117校の一つで、蒸気暖房や水洗便所、シャワー室など最先端の設備を備えたモダンなデザインの校舎でした。道を隔てたところにあった淡路公園も、震災復興小公園として作られた54の公園のうちの一つでした。地域のシンボルであった淡路小学校も平成9年に廃校となり、惜しまれつつ解体されました。[大橋智子]



写真提供:千代田区立昌平小学校

■ 淡路画廊(煉瓦造の蔵)・・・再開発地区北東角の蔦に覆われた白い蔵は、淡路町画廊とし絵画や写真の展示、時にはミニコンサートなどが開かれていました。壁は白く塗られていますが構造は鉄で補強された煉瓦造です。大正6年造、震災・戦災を生き延びてきました。蔵は解体されましたが、鬼瓦、窓、煉瓦壁など部分保存され、別敷地にRCで再現される蔵に使用される予定です。[桐原武志]





## おわりに

日本建築家協会関東甲信越支部 千代田地域会 代表 赤堀 忍

東京都心部、千代田区神田淡路町に、つい最近まで、かつて多くの下町にあった住宅地の親密な雰囲気は今なお感じさせる、木造2階建て二軒長屋が集合した一角がありました。関東大震災後に建てられて戦災を免れ、改造を加えられながら今日まで使われてきたすまいは、東京のここかしこにあった木造住宅地と同様に、都市開発によって、その姿が消されようとしていました。

2009年10月11日から11月11日の間で延べ9日間、日本建築家協会(JIA)千代田地域会は、メンバーの有志を中心に建築家・研究者・学生などの参加を募り、淡路町二丁目西部地区第一種市街地再開発事業組合および元住民の方々の協力を得て、この一連の建物と路地空間の実測調査と、元住民の方々への聴き取り調査を実施しました。

都市開発が進む東京の住宅密集地のほとんどの地区では、何の調査も行われず、都市開発により建築遺産が壊されているのが現状で、ヨーロッパのように解体時には必ず建物の調査記録を保存するという習慣は日本にはありません。神田淡路町では幸いにも、再開発事業組合と元住民の方々のご理解のもと、調査ができたため、ここに記録をまとめ、皆さんに伝えることができます。

今回は、建物の実測だけでなく、そこにお住まいになられていた方々から、神田淡路町のかつての様子を聴き取ることができました。台所の排水をトイレに流す水洗便所のあり方を見ることもできました。このような生活の工夫や、井戸のある路地を中心とした街区のコミュニティーの生活を、時代を遡って感じ取ることができました。私たちは、今後の社会に伝えていくべきものとして、このように街と建築の遺産を調べ記録することを、機会あるごとに行っていきたいと考えています。調査と記録作成に協力してくださった皆様方に、深く感謝申し上げます。

## 調査・記録作成スタッフ



赤堀忍 ｲﾄﾚｽ & ACD / 芝浦工業大学  
JIA千代田地域会代表



鯨坂徹 三菱地所設計  
JIA千代田地域会会員



伊郷吉信 自由建築研究所



市川達夫 伊藤建築設計事務所  
JIA千代田地域会会員



大橋智子 大橋智子建築事務所  
JIA千代田地域会会員



太田安則 佐藤総合計画  
JIA千代田地域会会員



桐原武志 芦原建築設計研究所  
JIA千代田地域会会員



篠田義男 篠田義男建築研究所  
JIA千代田地域会会員



戸田光栄 戸田商店  
JIA千代田地域会准会員

調査に参加された方々 (敬称略)

市村康子(伝統技法研究会)  
金田正夫(設計工房・無垢里)  
山本玲子(全国町並み保存連盟)  
柳田伸幸(日本大学生産工学部  
学生[調査時])  
柳本三貴子(芝浦工業大学学生  
[調査時])  
渡辺秀人(日本大学生産工学部  
学生[調査時])

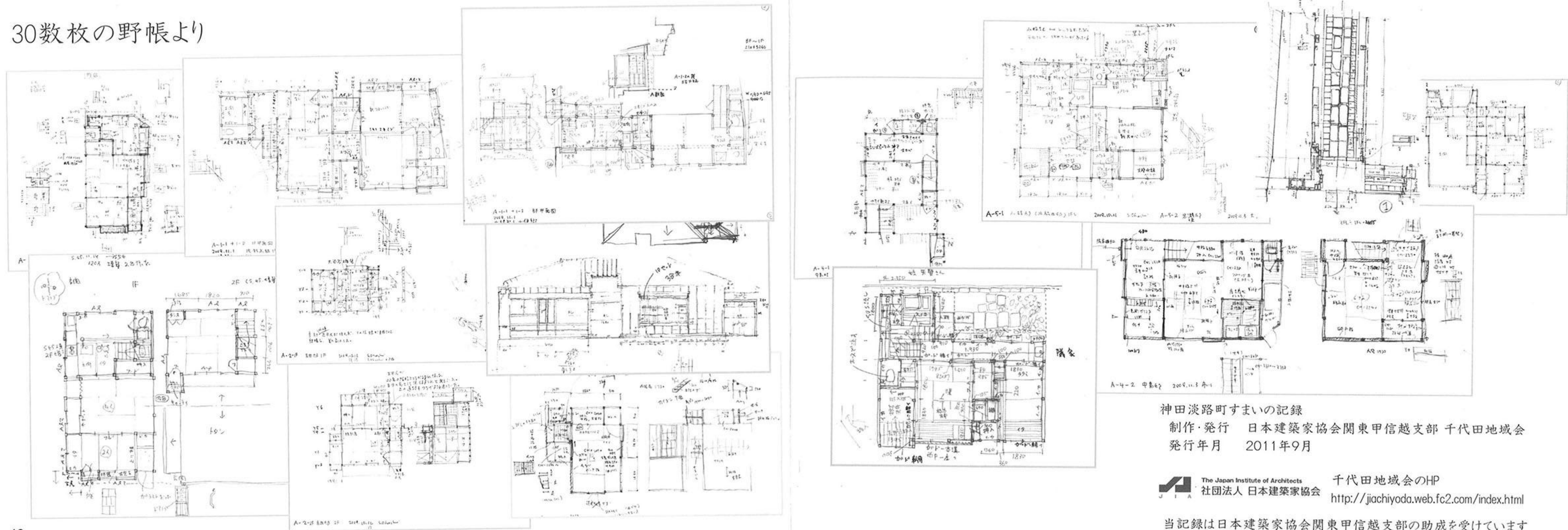
調査・記録にご協力いただいた  
方々 (敬称略)

稲葉和也(建築史家)  
小田島喜子(大橋智子建築事  
務所)  
後藤宏樹(千代田区四番町歴  
史民俗資料館学芸員)  
安野 彰(文化学園大学)  
山崎順二さん 他住民のみなさん  
淡路町二丁目西部地区第一種  
市街地再開発事業組合

■ 特記なき写真は調査参加者が撮影した写真です。



# 30数枚の野帳より



神田淡路町すまいの記録  
 制作・発行 日本建築家協会関東甲信越支部 千代田地域会  
 発行年月 2011年9月

The Japan Institute of Architects  
 社団法人 日本建築家協会  
 千代田地域会のHP  
<http://jiachiyoda.web.fc2.com/index.html>

当記録は日本建築家協会関東甲信越支部の助成を受けています



※ 「神田淡路町すまいの記録」冊子中に誤植がございます。詳細については、下記の正誤表にてご確認ください。

正誤表		
page	場所	誤、正
2	解説 2 行目	誤 …敷居が高く、まり読む気が… 正 …敷居が高く、あまり読む気が…
4	本文 2 行目	誤 …この一体は 正 …この一帯は
30	本文 4 行目	誤 …柳行季 正 …柳行李
38	山田さんのすまいの 4 行目	誤 …違い棚や透か欄間… 正 …違い棚や透かし欄間…
39	淡路小学校 / 淡路公園	誤 …54 の公園… 正 …52 の公園…